家庭雜誌

第六拾柒號

(意匠登錄出願中)

今般弊堂に於て發賣仕候袱紗附御紙入の儀は多年の刻苦より案出せる所にして其裂地の如きも尋常有觸れたるものにあらずして彼の室町源氏の中にて數寄者の第一と稱せられたる東山義政公が時の大將軍の勢力を以て有らゆる天下の織物師に命じ自から意匠を示して織らしめたる模樣を手本とし全國織物の本場と稱せる西京西陣の織屋に託し別機を用ゐ丹誠を抽で精巧精美を極めて織り出ださしめたる良品を以て製し其仕立方の儀も世間普通の仕入物と事異り東京第一たる高等の縫物師を選抜して針目を取らしめたるものなれば織目等も丈夫にして且つ袱紗の表は室町好みの織物を用ゐ裏は鹽瀰織を附け色の配合も有名なる意匠家が工風に成りしものにて其數類も澤山これありいづれも文明的の御持物たるに負かず殊に袱紗にも「かくし」を附けたれば其御便利なる事更に喋々することを待たず要するに其裂地といひ其模樣といひ其仕立といひ一も美術に負むける點なく一も優美高尚ならざる所これなく別して近來は諸君の御好みを充さんが爲め御注文に依りては佳良絶品の絹絲を以て縫取り若くは御紋所其他如何なる模樣にても縫ひ出させ美麗に調製仕候間文明的の御粧飾品として貴顯紳士紳商貴婦人令孃は更なり粋士粋女の方々まで時好に晩れさる樣續々御用向被仰付下置候樣伏して奉懇願候敬具

定價

女持
一圓二十錢
一圓八十錢
六圓五十錢迄

男持
一圓五十錢
二圓八十錢
八圓迄

御不用品讓受

弊店儀今度美術袋物營業の傍諸家樣にて御持ち古しの金銀屬御不用御品を高價に讓受け申度右は弊店美術品創作の參考品と致し意匠を加へて益々其精を勵み御需めに應じ一は明治の美術に光彩を添へ一は諸家御高庇の萬分に酬ひ奉らんとの所存に御座候何卒讓受、製品御買上げ兩樣共右御用向被仰付度此段奉願候

東京下谷區池の端仲町
美術袋物商 玉寶堂
飯塚伊兵衛

○歐洲大勢三論　德富猪一郎　深井英五合著　定價十五錢　郵税四錢

○大日本膨脹論　德富猪一郎著　定價十錢　郵税二錢

○支那論　竹越與三郎著　定價十錢　郵税二錢

○臺灣　定價二十錢　郵税二錢

○臺灣語集　通譯官股野保和編纂　定價六錢　郵税二錢

○臺灣地圖　一枚一錢五厘　郵税一錢

○日清軍記　前編　定價十五錢　郵税四錢

○日清軍記　後編　定價十五錢　郵税四錢

○日清軍記　續編　定價十五錢　郵税四錢

○軍歌支那征伐　人見一太郎著　定價三錢　郵税二錢

○國民的大問題　人見一太郎著　定價二十錢　郵税四錢

○第二の維新　人見一太郎著　定價十錢　郵税二錢

○第二國民小説　定價十五錢　郵税六錢

○第三國民小説　定價十五錢　郵税四錢

○第四國民小説　定價十五錢　郵税四錢

○今世名家文鈔　定價二十錢　郵税四錢

○歸省　湖處子宮崎八百吉著　定價十五錢　郵税二錢

○最暗黑之東京　乾坤一布衣著　定價十三錢　郵税四錢

○懷舊　ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯　定價二十錢　郵税四錢

○吉田松陰　德富猪一郎著　（肖像入）　定價五十錢　郵税八錢

○グラッドストン　德富健次郎纂譯　（肖像入）　定價二十錢　郵税四錢

○武雷士（ブライト）　德富健次郎纂譯　（肖像入）　定價十五錢　郵税四錢

○格武電（コブデン）　德富健次郎纂譯　（肖像入）　定價二十錢　郵税四錢

發兌元　東京々橋區日吉町　民友社

青年叢書第五卷

技術

定價拾貳錢　郵稅貳錢

批評片々

◎朝野新聞　簡明率直、以て各般の事を敎ゆる者は、民友社出版の圖書なりとす。今や青年叢書、卷を追ふて第五となり、例の快文を以て、截直に技術を說く、一讀血の躍るを覺ゆ

◎文學界　これ青年叢書の第五卷にして例の民友社出版たり技術と云へば其範圍甚だ廣くそを概括する素より容易の業にあらず余輩は民友子が小冊子中に於て此大問題を約說し得たる才筆を稱揚せざるを得ず

◎讀賣新聞　青年叢書の第五卷にして先づ總論を掲げ次に原理と精神とを說き遂に建築彫刻音樂雄辯詩歌等の部門に及ぶ小冊子と雖も簡にして要を得たり

◎東京日々新聞　青年叢書の第五卷として發行せるものゝ建築彫刻音樂雄辯詩歌等の技術を汎說したるものなり

◎經濟雜誌　先づ技術の原理より說き起こして建築、彫刻、音樂、雄辨、詩歌を詳論したるものなり

◎國會　本書は青年叢書の第五卷として刊行せられたるものなり先づ技術の總躰に就いて論じ次に技術と近世生活の關係を觀察し延いて建築、彫刻、音樂、辯雄、詩歌等の技術に關連する諸題目を捉へ來りて一々論究せり試みに採つて繙閲熟讀せばその所謂技術なるものゝ要領を知得するに餘りあるべし

平田久著

露西亞帝國

印刷中

章を分ちて四となす、曰く。

◎露西亞の天然◎露西亞の膨脹力◎露西亞の同化力◎露西亞國民◎

第一章に於ては露西亞の地理を說き其の天成の大帝國として不便にして形勝の地を占むるを說き、第二章に於ては露西亞帝國の成立よりして東歐に於てコンスタンチノープルへ、中亞に於ては印度へ、東亞に於て朝鮮へ南下せんとの欲望及順序を說き、第三章に於て征服的勢力なるのみならず、同化的勢力なることを說き、第四章に於て此の地理、此の歷史を有する國民の性情を分拆して將來を說かんことを試む。別に露西亞は或るものゝ云ふ如く外交の國にあらずして武力の國たることを論じて現時の國情を說かんことを試むるの一章あり。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

塚越芳太郎著

四版

十二文豪 第七巻

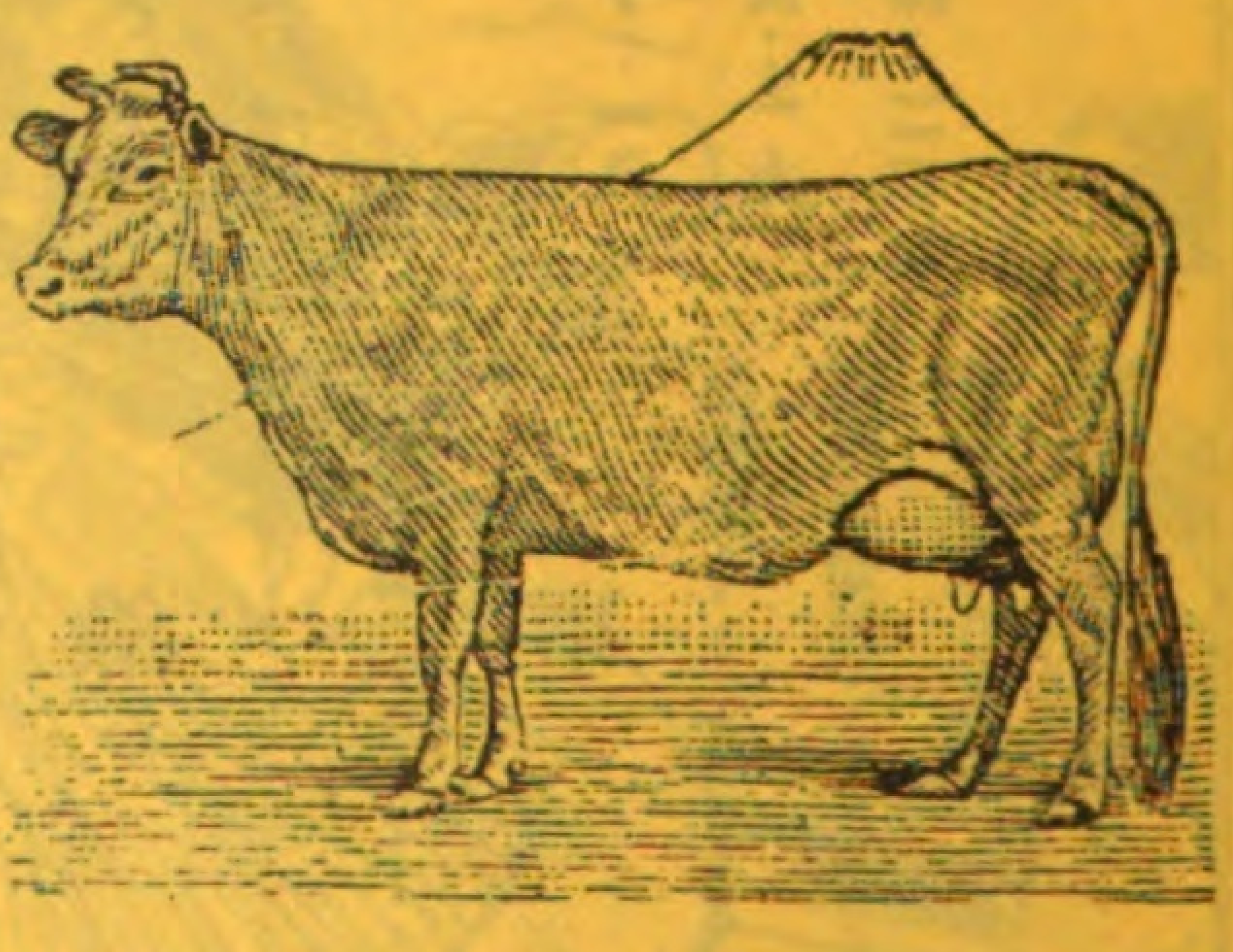
近松門左衛門

自筆肖像入　定價金十八錢　郵稅金四錢

目錄●年譜◎序言、近松門左衛門◎現實界に於ける彼、第一〇元祿の日本〇彼の生涯、上〇彼の生涯、下〇彼の詩人的生涯〇彼の著作〇彼の文章、上〇彼の文章、下〇彼何人ぞ◎理想界に於ける彼、第二〇彼の人生に對する觀念〇彼の男性に對する見解〇彼の女性に對する見解〇彼の社會に對する見解〇彼の宗教道德に對する見解◎結論、彼は多くの類似に於て日本の沙翁なり●附錄◎近松門左衛門著作表◎近松門左衛門著作一斑◎日本戯曲史

元祿文學は舊日本文學の絶頂也近松門左衛門は元祿文學の絶頂に吹鼓したるもの也彼は實に日本二千年の人生詩人也彼か文學は日本の文學として世界に誇るに足るもの也苟も文學に志ある者彼を知らずして可ならんや

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社



舍主宇都宮仙太郎は米國ウイスコンシン州農科大學乳業科得業生なり

畜牛は毎週囑托獸醫の診斷したる健全の者なり

醫科大學にて毎日試驗濟の上御買上に相成居れば乳質の善良にして安全なる推して知る可きなり

代價は世間並に候御試用の上御吹聽願上候

麹町富士見町六丁目一五

帝國大學醫院御用　回陽舍

電話六百十五番

實用 **速記法全書**　遞送費共　正價三十錢

最新最良ナル此出版ハ當所カ多年ノ實地經驗ニ依テ得タル良法ナレバ敢テ其効用ヲ喋々セズ唯願クハ名實相反スルガ如キモノト同一視スルコトナク一讀當所カ社會ニ對スル信義如何ヲ知ラバ幸甚故ニ規則ニ依テ質問ヲ受ケ卒業證書ヲ授與スルモノ也

送金方郵便爲換ナレバ拂渡下谷局郵券代用一割增

東京市下谷區徒町二丁目三十一番地　**速記學專修所**

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

		郵稅地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎

編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

前付の七

明治廿八年十月十日發行

家庭雜誌第六拾參號

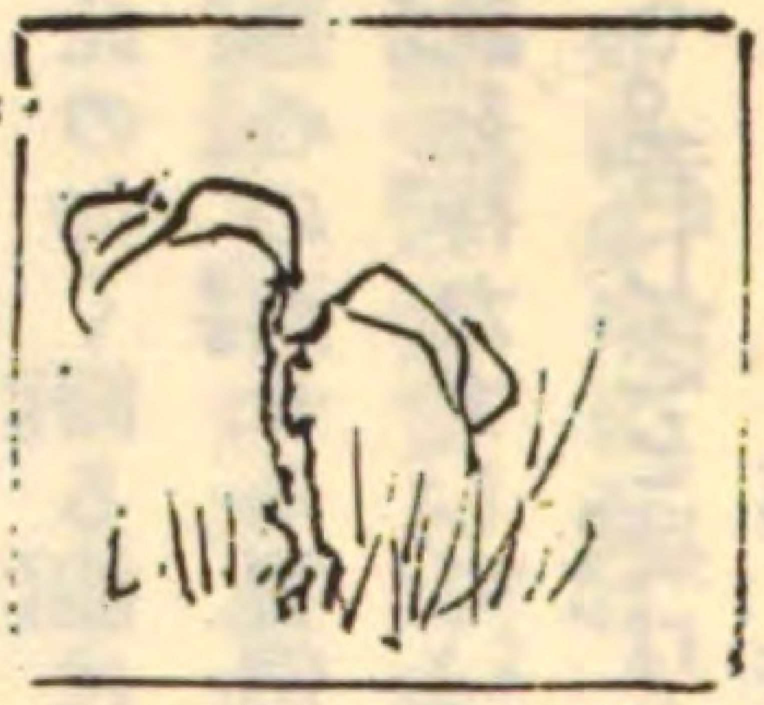
目錄



家庭雜誌第六拾參號
（明治卅八年十月十日發兌）

社説

小兒の教育



小兒の教育を以て、小學校に始まるものとするは固より大なる心得違なり、之を以て幼稚園に始まるとするも、亦非常なる心得違なりと謂はざる可らず。

小兒の心性は、その半ば以上は、未だ幼稚園に入らざる前、未だ自由に言語を發する能はざる前、未だ自由に歩行する能はざる前に形くらるゝものなり。

幼稚園に於て小兒の教育を始めんと思ふ勿れ、小兒が幼稚園に入る時は、白紙の如き彼等の心性は、業に已に善の色と悪の色とに染め分けたる縞の如きものとなり居るなり、而してその或る者は、善の部分多くして善人となるの傾向を有し、或る者は悪の部分多くして悪人となるの傾向を有し居るなり。凡そ眞個の教育なるものは、小兒の心性、無邪氣にして、少しの黒點なき時を以て、其始めとなさゞる可らず、之を別言すれば幼稚園に行かざる前、即ち生れ落ちてより三四年の間を以て、最も重要なる教育の時機となし、此時を以て、教育の基礎を作り、心性の根底を定めざる可らず

『テレマルク』の著書として今ま猶ほ芳名香ばしきフェ子ロンの如き、其『女子教育論』中に於て、教育第一の基礎は、小兒を未た言語を發せざる前に在ることを論じ且つ左の如く論及せり。

又た如何に此の年頃（未だ語る能はざる年頃）より小兒が己れに追從言ふ所の人を慕ひ、己に逆ふ所の人を嫌ひ避くるかを思へ、如何に小兒が己れの望む所

のものを得ん爲めに、或は叫び或は默するかを思へ
如何に小兒が既に僞りと妬みとを有するかを思へ、
セントオーギユスタンは言へり、余は嫉妬深き一見
を見たり、彼れ未た語ることを知らざりしと雖、彼れ
は他の一小兒か彼れと與に乳をのむ時に、顏色を靑
くし、眼を怒らして、他の兒を打眺めたりと。
此の如く語る能はず、歩む能はざる稚兒にして、已に
惡心の萠せる實例は、オーギユスタンやフエ子ロンの
說を待たずして、吾人の目前に幾多を有するにあらず
や。若し之を疑はゝ幼稚園に赴きて、小兒を觀察せよ、
幼稚園は、已に天のものにあらずして、地のものなり
小兒はそこに物を爭ふにあらずや、小兒はそこに人を
妬み、人を惡むにあらずや、小兒はそこに他を罵詈し、
他を毆打するにあらずや。彼等は幼稚園の敎育を受け
ざる前、既に惡に染み、既に僻に陷り居るにあらずや
果して然らば、所謂水子時代の敎育の緊要なるは、多
言せずして明らか也。
世の婦人たるもの、多く水子の敎育を忽にし、水子の
時は、只泣かせぬといふを以て、其目的となし、如何
に我儘なる事も、僻める事も、泣も止むの代價として、
之を宥恕することあり、是れ實に自らその兒の心に、惡
の種子、毒の種子を蒔くものにして、却て其兒に無慈
悲の所置を爲すものと謂ふ可し。就中小兒を毒するの
最も大なるものは、小兒を見守するものに托する事之
れ也。凡そ其兒を幼稚園に入るゝには、幼稚園の評判
を聞き正し、敎師の適否を聞き正し、その兒を托して
可なるや否やを究むるにあらずや、小學校に入るゝ時
亦然り、然るに獨り怪しむ可きは、五官漸く發達の萠
芽を生し、如何なる瑣末の事も其記臆となり、其思想
となり、其性質となるの時に於て、即ちその敎育上最
も大切の時に於て、其兒をば無學にして無識なる見守
に托し、時としては惡しき性質を有する見守に托して

顧みざるの一事也。若し詳に小兒の悪事なるものを檢査し來れば半ば兒守より教へられたるものなるを發見するとも珍らしとせざる可し。

故に水子の時は、力めて兒守に托するの時間を短くして、妻女殆んど常にその兒に付き添ひ、一擧一動、教育の心を以て、之を導かざる可らず。若し妻女家の内外に多用にして、常に兒を見る能はざる事情あらば、兒守の性質を吟味し、兒を托して害なきや否やを措かめざる可らざるなり。

職分に生れ、自由に育ち、進歩に活き、光榮に死せ　ユーゴー

史談

巾幗文豪

讃美生

今世紀の初、英國文界に輝く所の明星、斯の如きロードバイロンなり、斯の如きヲルター、スコットあり、斯の如き湖派詩人ソーゼイ、コレリッヂ、ラムあり、隱れて、然も世界を振動せんとする所のヲルヅヲルスあり。然るに當時の婦人界にあつて、一婦人否、適切に云へば妙齡なる處女にして、啻に此等の文豪と名を伴ふせるのみならず、其の或るものをすら凌んで上らんとする巾幗文豪あり。ヂエンオーステン女史則ち其人なり。

最大なるもの、歷史は、恒に最微きものなり。オーステン女史の生涯、亦頗ぶる之に似たるものあり。彼の名は英國文界の最大なるもの、一に數へられたり。然れども其の過ぎて通りし生活は、彼か其著作に於て、驚くべき精細の筆を以て描きたる生活の如く、尋常一般の生活なりしなり。大地は未だ嘗て彼の足の下に震はず、彼が平和なる生活を分つ所の隣家、親戚、朋友

同胞等は、未だ嘗て非望の暴風に掃き去られず、肅殺の運命の爲に奪はれざるなり。彼の生涯は、吾人の生涯の最大部分を占むる所の、日常の經營、日常の歡娯日常の憂患より出でざるなり。是の日常平凡の出來事を捕へて、歌ひ、語り、畫くもの、是れ彼の天才なり荒村寒落、一としてミスオーステンの小説の材ならざるなしとは、當時の讀詩社會の通り語なりしが如く、渠が記述の材料は、尋常凡平の逹く所に與り、然して斯く任じ近く見來つて何の奇もなき身邊周圍の生活を其六個の傑作に再現し、讀者をして讀むて飽くとを知らざらしむるの魔筆、是れを及び難しとなす。思ふに當時の詩界、唯一ヲルヅヲルス能く、從來荒唐の題目を破棄して、尋常の生活、即日の人物を、現實の生活現實の風景人物を歌ふ。彼は即ちヲルヅヲルスが、詩界にあつて爲す所のものを、文界に於て爲せるなり。宜なる哉、スコツトを棄てゝ、ヲルヅヲルスを繙く讀詩社會が、又スコツトを棄てゝオーステンを繙くをや。

ヂエンオーステン、父は牧師、千七百七十五年、ハムプシヤイア州、パシングストークより七里を隔てし、ステヴエントンなる一小村に生る。二十五の齡まで、彼は此の平和なる故村にあつて、平和なる生涯を過ぎぬ。渠が兄弟の內、二人は共に身を海軍に投じ、一の人は其の從兄より領邑を襲ひて田舍紳士たり。餘の一人は父の例を追ひて僧となりき。詩人に兄弟あるが如く、女史にも亦姉ありき。彼のカッサンドラ（姉の名を愛すると、母より勝れりとその相離れざると、形と影の如くなり）、さればカッサンドラが學校に通ふや未だ敎育に堪へざる女史をも、亦一處に遣らざるべからざりき。二人の母は云へり。もし姉が、首切らるゝともあらば、妹も亦頸を延べて刄を受けずば承知せじ』と。姉妹の友愛は永遠のものなりき。彼等の性情は、太だ似たるものではなかりき。女史は機敏に、感じ易

き方にて、サンドラは、沈着きたる、平静なる方なりき。女史は姉を畢生己よりも心賢こく、健かなるものと信じて畢生彼を恃みとせしなり。

オースチン一家は、時々近村遠村の親戚を見舞ひて、其寂しき生活を繁かにしたるが、小供等の第一の歓娯は、うち集ひて内端芝居を演ずるとなりけり。彼の其の作『ノーサンガー寺院』『説得』、『マンスフヒールド公園』中屡其の歓娯の影を點じて波瀾を作せり。

然して彼等の内端芝居の脚本は、常に彼等の手に由つて書かるとなり。嗚呼是れ是の巾幗文豪の二葉の萌芽なりしなり。彼に操觚的慾望を皷吹したるものは、實に此の脚本を書くの快樂なりけり。然して、是の内端芝居又實に彼を操觚者に導く一の便利なりしなり。

蓋し當時婦人にして記者たるは、多少の困難なくんばあらず。何となれば當時の社會は、婦人の記者たるとを容れざりしかば、千八百八十七年十二月ホロエイ大學に於て、現今女皇の銅像開幕式の演説に於て、グランヂル侯は公然、婦人の最大過失は、學ぶとにありてふ、前世紀に於ける佛國大家の言、及び、婦人に取つては、北京の歐羅巴中にあらざると、アレキサンドル大王が、ルイ十四世の養子にあらざるとを解せば、十二分の博識なり云々の語を摘發し、之に加へて、前世紀にあつて卓絶なる政治家にして文豪なる一名士、其女の綴れる妙なる韻語を見て、激賞したる後、世間の彼女を認めて、物書女と誤認せられんとを虞れて、爾後固く斯の如きものを綴るとを禁じたる逸事を語りぬ前世紀より今世紀に亘る、婦人と操觚に對する社會の僻見、是を以て觀るべきなり。

若し同樣なる僻見の、オースチン家の間に行はれしならば、そは定めて彼等が内端芝居の脚本を書く常習に由つて、漸漸融解されたるらし。何となれば、オーステン家の父母は、女史の操觚を嫌忌せしと、如何なる

事實も之を語らざればなり。吾人は女史が、恒に家人の居間に於て書きたると、親戚の人若くは新なる知己の外、決して其艸稿の父母に見らるゝことを避けざりしとを讀めり。彼が當時用ひて書きたる桃花、心木の机、今も猶ほ其家に存せり。父母が決して、彼が書くとを妨げざるのみならず、却て成るべく其便利を與へたるものゝ如し。彼は其の書くとの天才を恃んで、其の兄弟、朋友を凌ぐが如き事をせざりき。一言にして云へば彼は少しも氣取らざりしなり。彼は其の言語、風俗より乃至態度、仕事に至るまで、飽までも婦人を離れず。又その幼きよりの庭訓に由つて『衣物の出來ぬ』と評せらる『女史』の常習を免れたり。彼が針の產物が、今も猶ほ保存せられありて、之を其の筆の產に比するに、その美なる點に於て、巧なる點に於て、一歩を讓るを見ざるなり。さて又彼の筆に忘るゝと、魚の水に忘るゝが如くなりしかば、彼が英國文界に寄進したる傑作は、彼の猶ほ二十の齡を超ゆる前に成就し、然して之を成すの簡易にして然も自然なるとは、其の家族をして世界第一の小說を書くとは、世界第一の易事なるとを思はしむるまでにてありき。

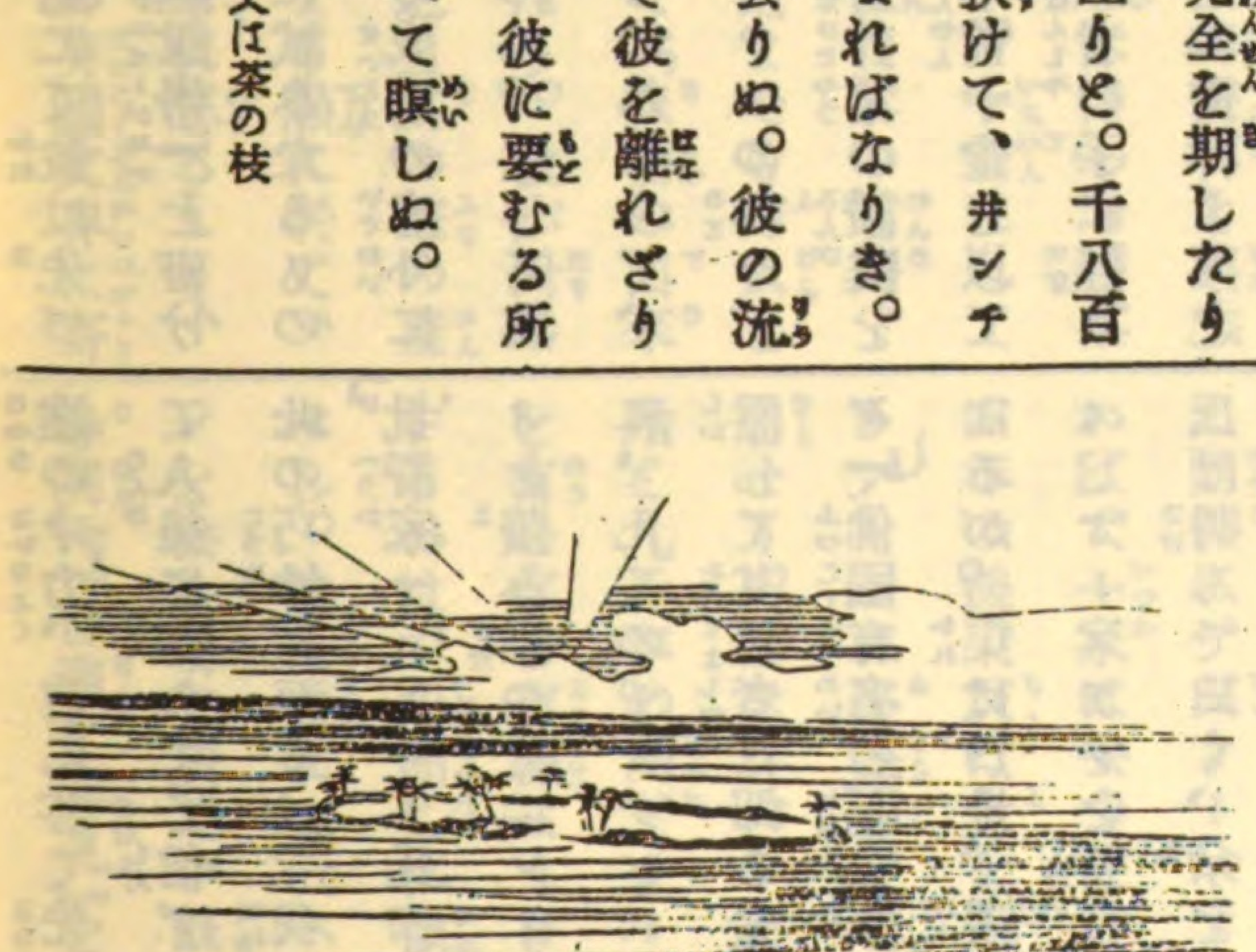
千八百一年、ステウベントンの家屋はいたく荒廢すると同時に、父オーステンの健康衰へ、生業を抛棄せしかば、一家は去つてバスと云へる小村落に引越せり。四年の後、父は世を歿へ、殘る家族は、又一時サウサムプトンに移住し、尋て千八百九年又カウトン村に轉居せり。ステウベントンよりカウトンに居を定めし迄殆ど九ケ年の間、オーステン一家は、殆ど家らしき家を有せざる有樣なりき。然して又女史が如何に內を愛するかは、此間これ彼の筆田の不作なりしを見て知るべし。彼は前にも云へる如く、其の故鄕ステウベントンを去る前に於て、既に『感覺と感性』、『イサンガー寺院』、『自滿と僻見』を書きたり。然して其の之を世に

出したるはカウトンに於てなりき。此處にて彼は先づ『マンスフヒールド公園』、『エムマ』及び『説得』を書けり、千八百十一年彼が始めて讀詩社會に試みたるものは、最初の作『覺感と感性』なりき。其の成功の意外に出でたりしかば、他は次第版に上ぼられぬ。然して其結果は單に讀詩社會の平流を動かしたるのみならず、當時文界の泰斗と仰がるゝヲルタースコットの如き、サウゼイの如き、コレリツヂの如き、皆非常の讚美を以て彼を歡迎したり。是に以て彼の數年前十金を以て賣りたる『ノーサンガー寺院』の猶ほ出版者の手に握り潰され居るを、元の値にて買ひ復し。他の書林より之を出して、其成効を以て、世に疎き前の出版者に一驚を喫せしめぬ。

今、世のオーステン女史の天才に關する評論を見るに、ヲルタースコットは曰く、『余は二度乃至三度、彼の『自滿と僻見』を讀みたり。尋常平凡の生活を活寫する、嬢の才力、前に嘗て先つものを見ず、奇を寫すは我敢て人後に在らずと信ずるも、尋常平凡の事を描きて。此の巧妙に至るは、我の遠く及ばざる所』と。有名なる批評家マコーレー氏曰く『ヂッケンスを讀み、プリニイを讀み來つて、『ノーサンガー寺院』を繙け、是一書是れ、凡てのヂッケンス、凡てのプリニーに當るに足る然して其著者は即ち童女なるのみ。是は如何なる怪物ぞ』。佛國有名の歷史家ギゾー氏は甚しき小説の愛讀者なるが。渠は曰く、現世紀の巾幗文人の中に於て、ミス、オーステンを首位に推す』と。ジー、エチ、レウス氏は叫んで曰く、余をして若し筆あらしめばエーヴレー小説（スコットの著）中の孰れよりも『自滿と僻説』を書かんとを願ふ』と、ゼオヂ、エリオツト女史は曰く『若し美術家なる語を用ふるを得ば、余はミス、オーステンを以て近世最大の美術家と呼ばん』と。彼が天才に對する輿論は、斯くして定まれり。

千八百十六年、(女史四十二歳)女史の健康は著しく毀はれたりき。然れども彼は之が爲に須臾も筆を棄てざりしなり。その『説得』の如きは、病中に成りたるものにて、其の末章の如きは、其の意に充たざるが爲に一たび稿了したるものを書き改せしなり。彼は其の健康の覺束なきにも拘らず、其著作には完全を期したりき。謂へらく之を完全にするの力我に在りと。千八百十七年、その姉カッサンドラは女史を扶けて、ヰンチエスターに徙りぬ。これ彼の健康に利なればなりき。されどその年七月十八日彼は終に世を去りぬ。彼の流麗なる性情と、闊活なる氣象とは終まで彼を離れざりき。臨終の近づきたる時、侍者の一人、彼に要むる所あらばと問ひぬ。彼が死の外何もと答へて眠しぬ。

此頃の挿花には梅もどき、紫苑、江戸菊、又は茶の枝などもよし



科學

小兒の世界

嵯峨のや主人

珊瑚虫

我々は諸君と共に隨分多くの動物を見ました、然し此樣無量無數の澤山は、まだ見た事も聞た事もない、何といふまあ澤山の事でせう！空も、地も、水も、宛然動物で充滿して居ます。木の皮、木葉の節、池水の一滴、其中にも百萬の動物がうごめいて居ます、而して其種類のさま／＼な事、迚も一々名を附る事は

出來ません、然し其でも彼等は皆各生て居るのですから、感じ。動き、食ひ、子を生み、而して死ぬのです若し彼自由に大空を飛揚する鷲や。人間に似たる猿や智慧の澤山ある象を以て一度板に乘せられて水に投らるゝや、一生を一ッ場所に於て送らねばならぬ蝸牛に比べる時は、其差はまあ何と大したものでは有ません歟然も蝸牛を以て、彼顯微鏡で漸やく見ゆる、極微水蟲に比べたなら如何樣ものです、殆んど一ッの水膜に過ない程な、極微水蟲に比べたなら。若し又更に彼を以て植蟲に比べたなら、其植蟲は動物と言はんよりは寧ろ植物に似て居て、其生命の有無は、僅に鬚を動すので分る程な植蟲に比べたなら如何樣ものです。

植蟲の最も有名なのは、彼海の最も淺い所に住んで居る珊瑚蟲です。此動物は甚だ小さい、然し彼等は一箇所に甚だ多く居て、其働くや彼等全躰の社會を擧て働くのですから、其大きさの最小なるに係はらず、最も廣大の事業を成します、勿論其は事業を成さうと思ふて成すのではなく、無意識の間に成すのでは有ますが。

今珊瑚蟲の一生を、如何なるもの歟と言て尋ねる、と彼の一生は海も餘り深くない所の石に身を吸ひ付而して一生の間鬚と探手とを動して、海中に浮び來る種々の物を、其口の中へ追入ます、此追入られたものが彼を養ひ、又其一分は彼の躰中に於て石灰質的の固形躰となります。勿論珊瑚蟲なぞに心臟や、肺や、眼や、骨や、腦の有る理は有ません、唯もう胃袋の有る寻で然して彼の次第〳〵に食ッた物が、彼の躰中に於て次第〳〵に石灰的質に澤山になッて、而して終に躰中充滿石灰質的となりもう之で殖る場所もないとなる、と珊瑚虫には生て居られません、彼の一生は此處に終て仕舞ひます。然し彼は存生中、己に等しき所の植蟲を生じて居ます、而して其新珊瑚蟲は、舊珊瑚蟲より離れず、其周圍に固まり着ながら、又兩親の通りの生活

を始ます、即ち、鬚で食物を捉み。其で躰中に於て石灰質的になし、又其間に子を生み、而して死んで仕舞ひます。然して其石灰質的の珊瑚は、前の珊瑚の周圍に固まり着たのですから、とんと木の芽が一ッ所から出た様で、之を珊瑚樹と名附ます、



圖に示す所の右の方のは、即ち珊瑚樹の全形で、其左の方には、珊瑚蟲を一箇別に取除て、之を幾倍となく大きくした形です、其中央にある穴は彼の口で其周圍に見える筋のある物は、軟かな滑らかな彼の探り手及鬚で、之で彼は食物を捕捉るのです。



一の珊瑚蟲が他の珊瑚蟲を産み、又珊瑚を造りて死するや、他の珊瑚其業を受け、斯して十年、百年、二百年、千年、と星移り物變る間に、百萬の珊瑚蟲生れて百萬の珊瑚蟲死し、死しては生れ、生れては死する其間に、珊瑚蟲の領地次第に廣まり、終には數里の海底を珊瑚樹を以て埋めるに至ります。

其に珊瑚蟲は横に向て繁殖する計でなく、又上の方へも繁殖します、然し海の表面にまで上り終るや否、彼の事業は終です、何故なら珊瑚蟲は水中に於てのみ生て居られるが、水面上に出ては直死でしまひますから此の如くして海中に恐るべき所の洲が現はれます、其を航海者が知らず、度々之に船を乘懸て、困難する事があるさうです。

此の如くして珊瑚蟲は其業を終ります、然し海と風とは更に其業を續けます、海と風とが砂だの、海中の植物だの、木や、草の種だの、種々の動物の種だのを持て來るので、終には水底より一個の島が現はれます、すると鳥は其島に飛で來るし海獸は空氣を吸ふ骨休めの爲めに匍匐寄るし、木は生ずるし。草は生へるし、

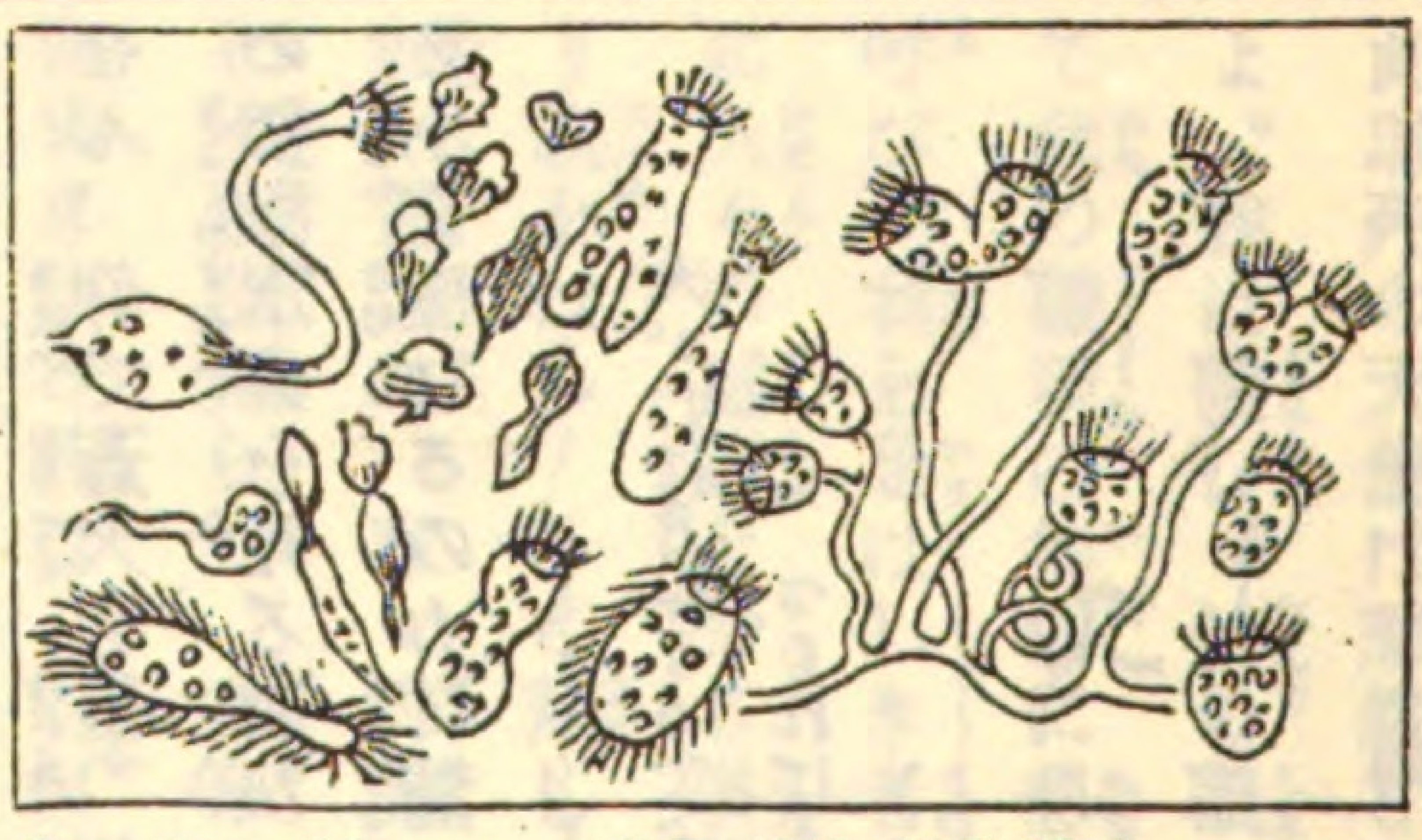
生長する、果を結ぶ、枯れる、腐る、土となる、動植物は愈々繁生するに至ると、斯いふ次第。終に百年二百年經つ頃には、此島最早人の住まはれる程な立派な島となります。

上來陳述の如く殆んど無感覺、殆んど動くことも出來ない程の極微水蟲が、海底に於て働く、其結果が一個の島を現出し、地球の表面を變るとは、實に不思議と言て宜歟、何と言て宜歟、上帝の力の廣大なる、唯驚くの外は有ません。

極微水蟲

我々は肉眼では既に澤山の動物を見ました、然し顯微鏡で周圍に注意する、と尚更に多くの動物を見出します。顯微鏡に於てのみ見られる動物、之は顯微鏡的動物と申して、多くは沼だの溝の樣な溜水に生ずるものですが、然し彼は又只の眞水若しくは海水にも生じます、若し其水が有機躰を其中に含み、且つ太陽の光線に照さるれば。

此種の顯微鏡的動物、之を名附て極微水蟲と云ひます諸君若し試に一杯の水を取て、之を魚若しくは藁の上に灌ぎ、而して冬ならば數日、夏ならば數時間、太陽の光線に照さして御覽なさい、其水は細く長き膜で續て居ますから。若し諸君更に此一滴を取りて顯微鏡で照して御覽なさい、無數の極微小蟲、無數種類の動物が其中に一世界を作りて居ますから。



嗚呼此最小世界、此中に如何なる活動が現じつゝありませう歟！之を顯微鏡で見る時は、實に一種の奇觀です、此中に住息する極微水蟲、其中には或は水滴の表面に躍つて居るもあれば、或は一つに固まつて、太陽の光線に温まつて居もあり、又或は瞬間にして四方に散じたり、又一つに寄たりして居るのもあります諸君若し試に一寸其水滴に觸て御覽なさい、如何に彼

等が驚きませう歟彼等は皆一様に底の方へ沈んでしまひます、水の一滴が彼等の爲めには、實に廣大なる海なのです。嗚呼彼等の形と其大さとが、如何に種々で有ませう歟！上に示す所の圖を御覽なさい、或者は透明る程奇麗で、若者は海老、若くは魚に似て居て、水搔、尾、足、管口、爪の様なものを持て居るのもあります、彼等は其大さの最小極微なるに係はらず、極微水蟲は種々の機關を持て居て、物を食ひ、互に觸れ、而して動きます、彼等は又感じも持て居て、多少恐怖痛み等の感じを其擧動に於て現はします。若し夫れ水の次第に減じて、終に一滴全く乾き、太陽の光線強く彼等を直射するや、彼等に忽ち弱はり、其運動は遲緩になり、其身はふるへ始め、而して水の全く乾き終るや、彼等は死んで仕舞ひます。其死するや彼等は全く燃盡て一分時を過る頃には全く其形を止めぬもあれば或は數分間、數時間、數日間位まで殘つて居るのもあります。

若し此の如き小蟲も皆盡く其機關を持て居る歟と思へば、然も單純でない、幾分歟複雜した機關を持て居る歟と思へば、我々も造化の力に驚かない譯にはなりません、仰で蒼天を望み、俯して蒼海を見、翻つて又是等の極微水蟲を見るに及びては、我等は造化が其大を極め小を極むるの力に驚かぬ譯にはなりません、

大かたは月をもめでじこれぞこの
つもれば人の老となるもの　（在原業平）

文藝

一個の天使

矢崎孤村

最寂しかる夕暮の事なりき、夢の天使と死の天使とがなかよく抱き合ふて岡に降立り、黄昏の煙は野を込め

て、村もいと靜かなり、天祖の御社の森も霞み、甚太が水車小屋も煙て見ゆ、夜は終に來りけり。

夢の天使は最靜に翼を廣げて立擧り、安らかなる睡眠の種を最靜に蒔始めぬ。温和なる風は其を賤が家の靜けき窓の中に送りて、疲れたる農夫の枕に與へぬ、快き夢は平和なる田舍の民を抱けり、老たるも、若きも穉きも、幾何歟其夢にて樂しまされけん、病る者は其病を忘れて、暫時は苦痛を慰められき、悲しめる者は其悲しみを忘れて、暫時は愁をやりき、貧しき者は働きの疲を忘れて、暫時安息の樂を樂しめりき、嗚呼斯る善事を世になさば、其心は如何に樂しからん歟。

夢の天使は其業を終りて、寂しき朋友の傍に歸りつ、快然として言へり、見よ朋友よ、明日夜の明て、人々の目を覺したらん時彼等は皆其夢の樂しかりし事を思ひて、如何に我を有難がり、如何に朋友の如く恩人の如く謝する歟を、嗚呼斯る靜なる田舍に在て、人知れず慈愛を世にまくことの、如何に樂しき事なるよ。之を思へば如何に我々の責任は美しく、如何に我々は幸なるよ、と言ひぬ。

此時死の天使は愁然として其朋友を眺めつ、嗚呼朋友よ、我は羨む、汝の職の如何にも美しきを、其に反して我の職務の如何に悲しかるべき、人々は皆我を敵と呼び、我を忌はしき者として忌憎む、我は迚も汝と共に人々の感謝を受る事能はず、と言ひ終りて清き目より涙をはら／＼と落しぬ　之を聞ける夢の天使は左の如く言ひぬ、あゝ朋友よ歎く勿れ、たとひ世の人今こそ汝を忌きらへ、彼等の魂の天に歸り、父上帝の御傍にゆきける時は、如何で汝を恩人とし朋友として感謝せざるべき。我等も職こそ違へ、同じく是上帝の使にして、元よりの兄弟に非ずや、と言ひ終りて二個の天使は、倘快くやさしく相抱きて相親しめりき。

月下逍遙

讃美生

仲秋前一夜深くして、月益清し。寐んとして興倍加はる、即ち獨り、出て月下に逍遙す。橋上欄に倚り、月水心に漂ふを觀る、冷風衣を透し、初め涼しうして漸く寒く、久しく立つ能はざりしかば又去り、柳の蔭を傍ひて上り、日吉橋を亘り、山王祠後の坂を上る。七八分にして樹間より市中を望めば、一萬の人家、月下に浮び、燈火綺羅星の如し、絃聲沸き、歌聲雜り、笛聲散ず、蓊鬱たる密樹、人家の後を擁し、其中燈火甚だ稀にして甚だ明かなるを見る。其頂天色淡くして水の如し。壇を上りて祠に向へば、月明にして松、杉、樅、一樹を辨ず。樹影月影地に交つて宛然畫く夜の如し。仰ひで樹梢を見れば、高くして風あり、樹定まつて、葉の翻へるを見る。



祠頭燈あり、之に向へば余が影を一丈の後より從ひ來る。
禮拜すと云ふにもあらず、無心に祠に向つて佇立し、耳を澄し心を澄せば、四邊寂として聲なく、敬虔の心自然に生ず。尙ほ立つと霎時境愈寂しく心愈澄み、宛かも千山萬壑の中にあるが如し。忽然足下に飛ぶものあり。下駄にて當れば再び飛ぶ、蝦蟆なり。此頃の雨に依て、時を得て出で來れるもの。
身を轉じて門頭より石梯を下れば樹木自然に籬を成し内に家あり、家より外は遠くして野なり、喞々たる虫聲、遙かに聞けば雜然として耳に交はる、佇立して諦聽すれば雜然たるもの自然に合へるを覺ゆ。
境内を出づれば、月益清く、虫聲又益冷かに冴ゆ、四邊人なく我唯一人、月下に立つのみ。
歸り來れば隣舍皆定まり、唯家人我を待つ燈の僅かに戸外に漏るゝあるのみ。

比喩談

湘川漁夫

醫官と負傷兵

或る時東西兩國の間に戰爭起り、砲聲轟き硝烟卷き、銃丸雨霰の如く飛び散じ、兩軍入り亂れて攻め戰ひ血は流れて川の如く、屍は積んで山を成し、殺傷數夥しく、遂に西軍の敗に歸し、東軍よりは衞生隊を遣りて、置き殘されたる、西軍の負傷兵を擔ひ搬ばしめけるに、痛手を負ひて、倒れ居りたる、一人の兵士、敵の手に落つるを恥ぢて、從ひ行くとを肯ぜざりしかば醫官は其不心得を諭し、深切丁寧に、文明の軍の目的より、傷者を勞はる慈善の業にまで說き及ぼしけれ。此時兵士は少しく頭を擡げ、微かなる聲をいだしていへる樣「文明の功德は我能く諾へり、我は已に深手を負ひたれば、此後世に生きながらふるも、物の用に立

つべしとも覺えず、何故に君等は傷つける者のみを勞はりて、傷つかざる前に世の人を救はんとせざるか」と。

恤兵の業は未だ平和の主義に如かず。

兵器の製造

兵器製造所の主人、利器の發明に思案を凝らし、日々數十の大砲、數千の小銃を製造し、尙大甲鐵艦を一擊に沈め、一軍隊を一時に殪す、彈丸の工風などに餘念なかりしに、平和會の會員之をきゝて、苦々しき事と思ひ、其事業を差し止めんとて訪ひ來り、人命の貴重なるを、戰爭の慘憺なるとなど、餘す所なく說き語りしを、案外にも主人は一も二もなく諾ひしのみならず、始より平和は其主義なるを示し、更に進みて陳べけるは「君方の說く所甚だ善し、されど未だ全く迂遠の空論たるを免れず。我は同じ平和の目的を達するに、反對の方向よりす。人々の戰爭に赴くは、割合に死傷の尠きがためなり、完全の利器發明せられ、其使用に由り、戰爭に出づるものは必ず死すと事定まらば、凡そ命の尊きを知る者、誰れか好んでかくの如き危險を犯す者あらんや、故に我が兵器の製造に忙はしきは平和を保つに空論よりも實際の成効を重んずるにあるなり」と。

毒變じて藥となる

虎と寫眞

寫眞師山水の景色を寫さんとて、海岸に聳えたる山の上に器械を据ゑ、位置を正し居りたるとき、忽ち一陣の狂風砂を捲いて吹き來り、傍の竹籔より、一聲高く吼りて、猛虎現はれ出で、飛び懸らんとする勢に見えければ、寫眞師は膽を冷やして、あわてふためけども、免るべき道なく、遂に心を決して虎の前に跪き、こゝぞ人間の智惠の振ひ處と、百方力を盡くして、阿諛の言を弁べたて、虎の容貌の凜々しくして、威風あ

ると、其運動の身輕なると、其皮の鮮かにして、美はしきとなど頻りに譽め囃しけるに、此追從心にや適ひけん、虎は靜々と歩み寄り、害意なき樣子なりければ、寫眞師は尙も其心を得んとて、鹿羊の類より美人の寫眞に至るまで、箱より出だして悉く見せしめけるに、虎は一々見終りて、機嫌宜しく、己が身の譽められしを思ひ出し、自ら寫眞を取らんとを乞へり。寫眞師は直ちに目鏡を向けて取り終り、荒々しき猛き姿の儘にて寫したるを、恭々しく虎の前に捧げゝるに、虎は一目見て何故か失望の有樣にて、甚だ不興氣の體なりければ、寫眞師は商賣柄の事とて、早くも其意を推し、此度は猫の如き優しき容貌に作り直して示しけるに、虎は頗る滿足の樣子なりければ、寫眞師は下を向きて笑を隱し、小聲にて「寫眞の秘術は、眞物ありのまゝを寫すに非ず」と獨言しけり。

人常に己が身を己が身より勝れりと思ふ

朝顏の花

朝な朝なに咲き替へて、盛り久しき朝顏の、其のさきかふるは、今日の姿や昨日の姿にまさるらん、眠を醒ます程の、鮮かなる色に、心さとられ、長く佇みて眺め居り「何故に斯く心を盡くし、日毎日毎に、朝まだきより起きて、人の目を樂しませんと務め居るか」と問ひけるに、朝顏は甚く恥ぢらひたる面持にて、朝霧の中に半顏を隱し「我君よ、かゝる問は許し給へ、わが粧ひ飾るは、破垣の骨の現はるゝを恐るゝが故なりと口籠りて答へけり。

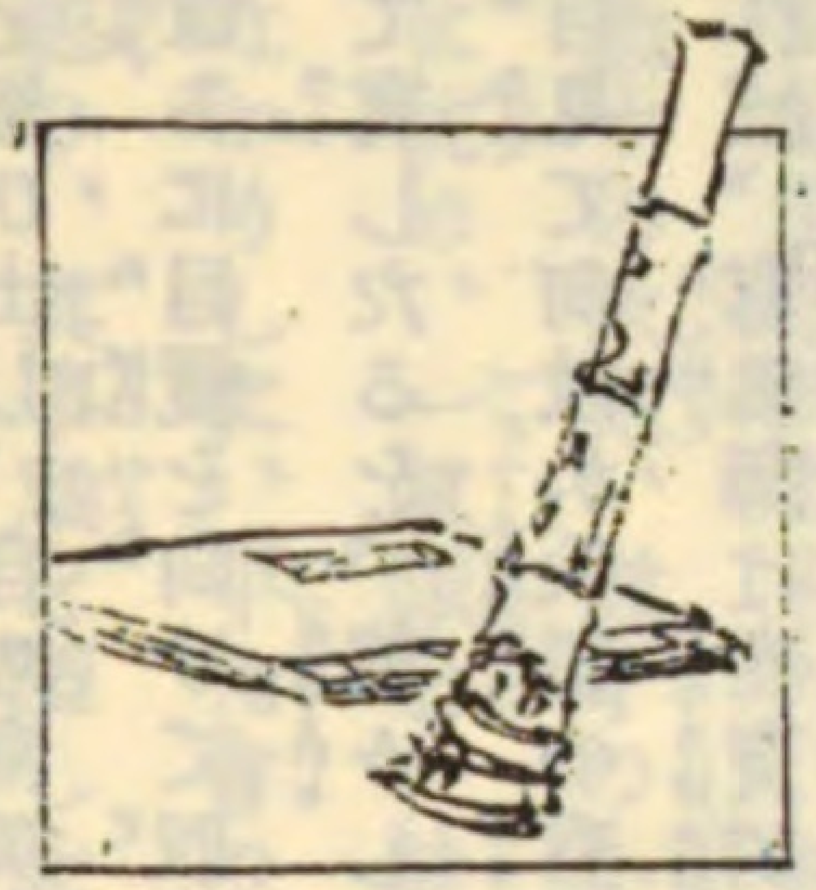
心の足らざる者は力めて表を粧ふ



談叢

兼友西園

鴨緑子



凡そ一藝を修めたるものにして、其名の普く世上に知られたるもの、未だ必しも名家大家と限る可らず。技藝は萬人に優れながら、身の邊陬にあるを以て遂に人に識られざるものも亦少からず。深山の幽花、自ら開き自ら落つ、豈惜むべきにあらずや。尺八の名家としいはゝ、何人も荒木古童を推すなるべし、然れども誰か知らむ、こゝに古童を凌ぐに足るの大家あるを、これを誰とかなす、兼友西園其人なり。」兼友西園は尾張名古屋の人なり、富豪の家に生れ、幼にして音律を好み、二十四五の頃師に就て尺八を學ぶ、これより日夕笛を弄して又餘事を顧みず、爲に家產傾むくに至りしかども少しも意に介せず、依然笛を手にしてこれが研究に怠りなく終に其妙域に達せり。こゝに於て就て學ぶもの多く、名聲漸くあがりしが、惜しむべし一昨年六十八歳の高齡を以て不歸の客となりぬ。

西園壯年の比より老年に至るまで、一日として尺八を手にせざることなけれども、吹くべき曲譜は十五六闋の外知らずといへり、これ甚だ怪しむべきに似たれども決して然らず。西園常に曰ふ。今の尺八を吹くものはその琴三絃等と合奏するに當りてや、終始琴三絃の曲譜に從ひ唯それ違ざらんことを恐る、故に尺八の聲は常に琴三絃の音調に埋沒せられ、折角己が苦心の跡も知られざるのみならず、却てその聲さへ全く聽かれざること多し、こ

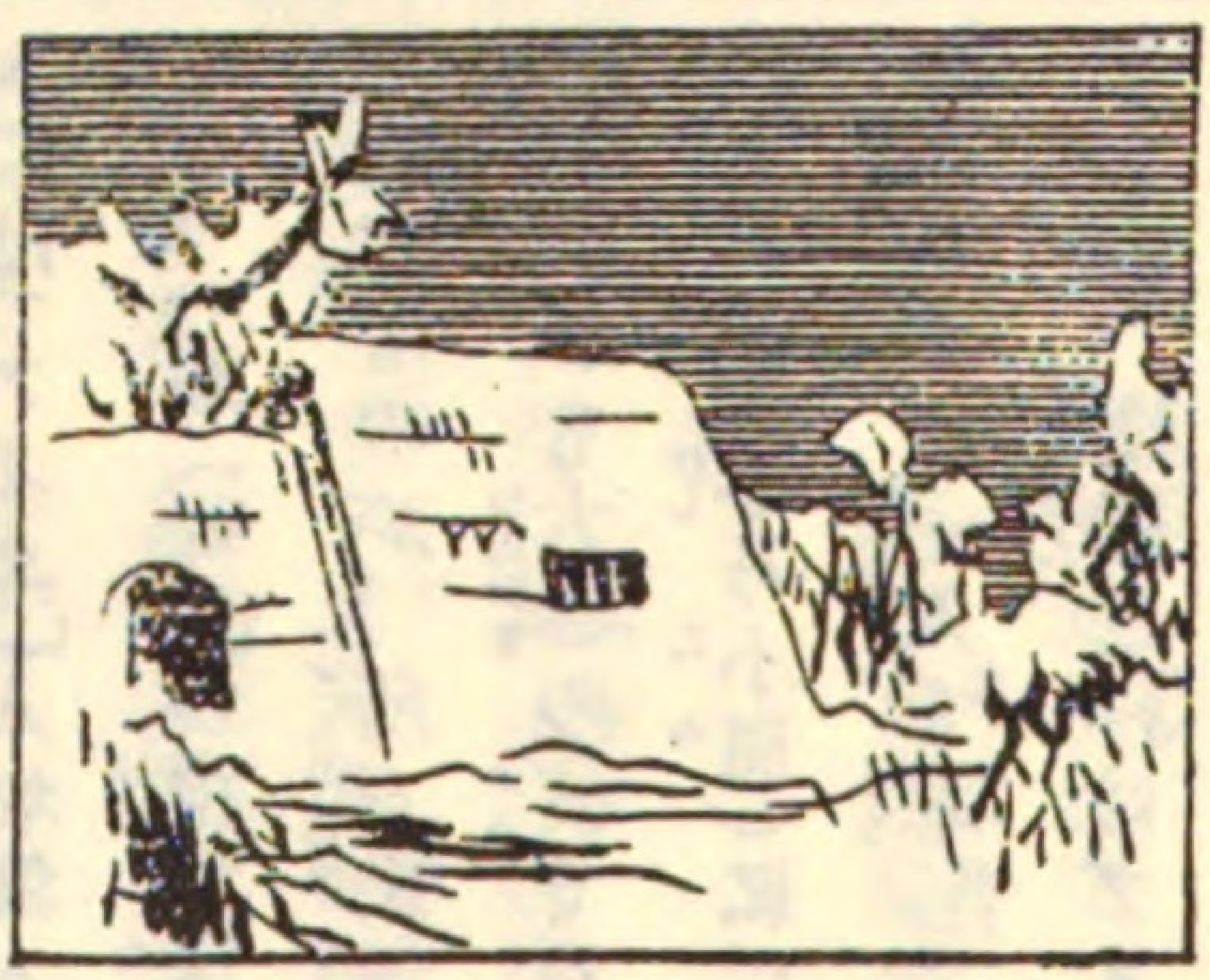
れ眞に骨折損にして又謬れるの甚しきものなり。凡そ樂器は各特色を有するものなり、琴は琴の特色あり、三絃は三絃の特色あり、尺八も又特色なからざるべからず實にこれあるなり。予は平生尺八の特色を發揮せんと研究することこゝに年あり。漸く尺八の聲として聽かしむるに足ると自ら信ずるもの十五六闋を得たるのみ。若し唯單に琴三絃に附和するを以て足れりとせば、いかに至難しき、いかに長き曲譜の予の全く知らざるものなりとも一度びこれを聞けるの後は直ちに合奏するを得べし。されどこれ尺八なるものゝ本色に非ず。聞く荒木古童は能く百闋二百闋を吹奏すと、知らずこの用意ありや否やと。

西園性剛直にして廉潔。嘗て某貴顯その音を賞せんと欲し、これを尋常一樣の藝人となして招く。西園怒りて、苟も一藝に師たるものを招く必ず禮なかるべからず、予不敏と雖も黄白の故を以て、平身低頭藝を賣るが如き事をなさずと、遂に辭して往かざりけり。この藝ありてこの志あり、以て斯道の大家たるに愧ざるなり、憾らくば世人の多く知らざることを、されど西園其人は強て識られんことを欲せざりしならむ。

薬鑵熊

某女

私が十二歳の時、父は官吏として北海道根室に在勤いたし居りました、素より私の家族を引連れて二年間程も居りました。



父は非常に銃獵が好きで、何より好きでした、在勤の間、餘暇があれば、銃を肩にして同僚と共に、必らず熊狩

に出懸けました。

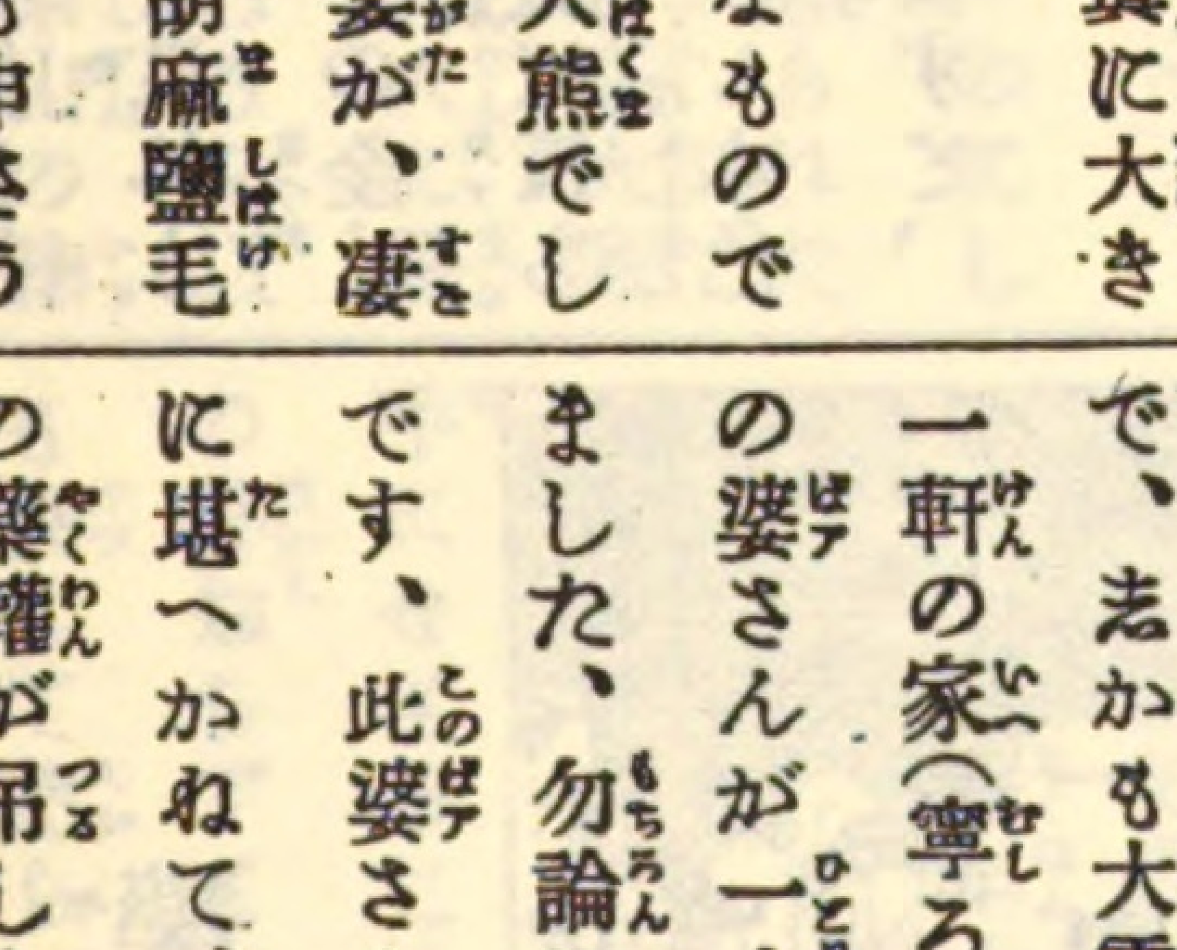
一日釧路の方角へ向ひて父と同僚二名、相携へて出かけました、すると一日を經て、父と同僚は大きな獲物を得て歸りました、アイヌ二人をやとひ、大きな老熊をかつがせて、私の門を這入ました、眞に、眞に大きな熊でした。

此熊は大きな熊ばかりでなく、此近傍に有名なものです、藥鑵熊と呼ばれて其前年より名を賣ッた大熊でした、月の輪と左の目の上を射られて死んだ其姿が、凄い程恐しい、大鋸の歯のやうな牙をして、胡麻鹽毛の粗い、而も其四足は大きく言へば醤油樽とも申さうか、兎に角すさましいほどの動物でしたが、其右の足の毛が悉く禿げて居ました。

これから此熊が何故に藥鑵熊の名を得しかを語りませうか。

* * * *

根室の町から餘程隔りました所に村落があります、こゝには「アイヌ」人が集りて日本人は一人も居ませんでした、「おへう」の皮で屋根を蔽ふた「かまぼこ」小屋のやうなものが、所々に散點して居ります、或る冬の夜で、しかも大雪の夜でした、一人一軒の家(寧ろ小屋)には一人の婆さんが一人で暮して居りました、勿論これはアイヌ人です、此婆さんが、冬の夜寒に堪へかねて、自在鉤に日本の藥鑵が吊しある居爐裏の前



へ、手足をくつろげて煖りて居りました、夜は深々と更け渡り、雪は切々と降りしきる。

暫時すると入口の蓆を押し開きてシッ〳〵と入り來るものがあります、婆はハッと目を其方へ向けますと、大きな熊の顏が見えました、婆は驚きもせず、身動き

もせず打眺めて居りますと、熊奴遠慮なくノッ〳〵這入込みました、それでも婆はちつとも驚きませんといふ譯は、此方では、能く此熊のみならず、此近所に居る熊とは慣れて居ました、イツも大雪で食物のない時は、熊から此婆に食物を請求に來ました、此方も食物があれば與へて遣りますから、熊も別に害を加えないで自分の穴へ歸る事が習慣となつて居ました。



今來た大熊は居爐裡を隔てゝ婆と對座し、例の如く食物を求むる仕打をしたけれど、其夜は何も食物がなかッたと見えて、婆は食物がないから遣られないといふ意を手振で知らせましたが、熊は立ち去りません、此方では又々其意を見せますれど、熊はなか〳〵承知しまのんから、婆は少し聲を荒らげて怒りますと、熊奴も目をみはり、牙をむき出しました。

流石の婆も怖氣が立つたと見え、そこを立つて退んとするを、座し熊も婆のアトをつけて立ち上りました。」熊は平生の恩をわすれて此婆さんを取りて喰はんと企てました、婆は早や恐懼に打たれて聲も立て得ないで居爐裏の四邊をグル〳〵廻つて逃ました、三度も四度も廻りましたが、熊はそれをもどかしと思ひましたか、右の前足を擧げて居爐裡越に婆の頭を見かけてなぐりますと、其的が外れて、生憎蓋の外れて居て、而も湯玉を立てゝ居た自在鈎の藥罐の煮湯の中に、其前足を落しました。

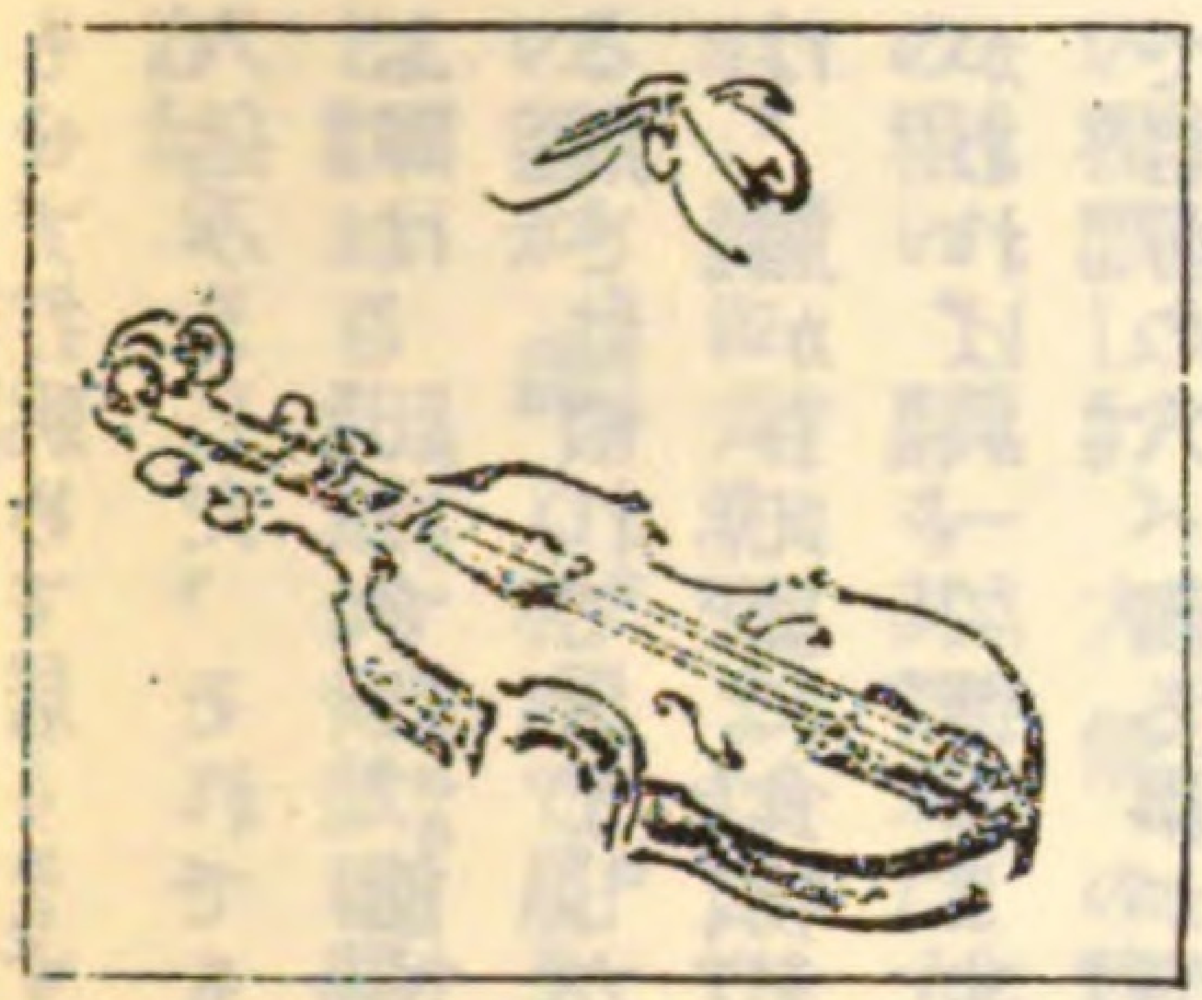
驚きました、其勢に婆はアツと氣絶をした、熊も勿論大驚で、直ぐと藥罐より足を拔かんとしても脫かれぬゆゑ、其間非常にかなしひ泣聲を揚げて、入間にはこういふ智恵があるかと驚くかの如くにて其藥罐を足につけたまゝ此小屋を出で、一目散に大雪の中を逃

げ去りました。
藥鑵があつたばかりで「アイヌ」の婆は一命を助りましたが、其熊は好い氣味です、火傷にて片足は悉く毛が脱けて仕舞ました、それまでの苦痛は一通りではありませんでしたらう、其後此熊は藥鑵熊の名を得て、時々獵人の目に觸れましたが、一年を經て私の父共の獲物となりました。

發狂者の話（西洋盜賊術）

志ばのや譯

私が「イストバーン」に持つて居る別荘は閑靜なる町に在りて邸の周圍には大木の繁茂せる廣き庭もあれば音樂師の住居には極めて適當なりとて友人等も賞めそやしました。



六月の或日夏熱に堪へ兼ね室内に入りて胡弓を取り出し彈じ居りしに室の戸をコツ／＼と二三度叩くや叩かぬ間に會て一面識もなき男は室内に入來りしが帽を脱して直に其處にありし安樂椅子に座りましたから私は「アッケ」に取られて見て居りましたが五十才位にもあらんか小形にはあれど躰格も能く見受けました。
亂暴にも私が今日飛び込ましたに就ては眞平御許しください私は貴君の直ぐ御近處に住む者ですが音樂が大好物にて貴君の奏樂を耳にするや居ても立ても居られませんから名刺も通せずに飛込みました定めし禮知らぬ者と御卑下なさいませうが平に御免を願ひますと左も丁寧に口を開きました。
此人は是は少し變だな、と私は內心に思ふた。
貴君は胡弓が十八番と見へます非常に御上手だ。
と一本打込まれて私の自惚心も出て來たと見へ好い氣になりて。

ハイ、胡弓は私の一番好なのです。
彼の男は胡弓を取りて何遍も見て「成程是は上等の樂器です急度二百「ポンド」はしましようと云ひつゝ。
胡弓を取りて二三回弦上をさすりました。
私は元來笛が好きですから何時か合奏して見ませう如何ですか。
是非にと私は答ひました。
何樣か願ますならば今の跡を御彈しなすッては如何です拜聽致度御座います。
私は此追願に何樣して反對できませう、ぐつと好い氣になつて胡弓を取上げて「本とに私は下手ですけれども御笑草までに一つやつてみませうとて彈き初めましたが今度は一生懸命に精神を込めました。
私は彈し終はりて見しに例の男は「キョロ〳〵」室内を見回はして居りましたが急に私に向ひて、
實に恐れ入つたほど御上手だ虚言ではありませんよ黒人も跣足です御蔭で面白く御座いました夫れに就ても私が御宅へ亂入したる事は平に御免願ます又例の持病が起つたと見へますと云ひつゝ手を額に加へて、
私は最愛の妻を非常に悲ひ事で亡ひました以來永ひ間瘋狂院の世話になつて居りました。
私は再び是は變だわいと、考へ始めて見れば成程此男の眼は一種の異光を放つて居た。
然し私は目下は全快して音樂にこりかたまつて此憂苦を忘れる樣にして居ます隨分憐れな御話ですから御聞き願ひませう、然し他へは極秘に願ます。
御廢しなさい、つまらなく又思ひの種となりますよ。」
ナー二、大丈夫です思を貯へて置くよりも御話して吐き出してしまつた方が宜敷いです、丁度私が二十二才の時の事にて、私は可なりの財產を持ち愉快に此日を暮して居りしが、或時「キングセト」と云ふ貴族から「クラスゴゥ」近傍の別莊に招待せられて、參りました、

同氏は「ムリール」と「デニース」と云ふ二人の奇麗な御孃さんの父にて私は此御孃さん達に可愛がられましたが遂に妹を妻に迎へんと決心し之が許可を得ました姉の方は非常に落膽して夫れからと云ふものは妹を惡む樣になり婚禮の日は一生の大儀式の事とて盛大なる祝宴を開きて「グラスゴウ」の紳士は皆臨席した位でした「ムリール」は知らぬ顏をしては居ましたもの丶頰の蒼白なると眼の赤味を帶びたるとに因り見れば心中に不平を存するを推知するを得て私は何となく是のみが心に快くありませなんだ。

婚禮の後直ちに新婦を携へて伊太利に旅行しましたが此時の樣に愉快なる日は又と私の生涯中ありませんで私は「テニース」を毎日拜んで居りました位です六ヶ月の後妻の里へ歸りました處「ムリール」も已に不運と諦らめたと見へまして以前とは異りて、「チヤ、ホヤ」して呉れ私も一先づ安心しました。

すると暫時にして「デニース」は病身になり日々頭が重く氣も鬱々となり從前とは違ひて神經質となり、つまらぬ事にも腹を立つ樣となりましたから懸りつけの醫師も殆んど毎日來診して度々私に向ひ奇妙な疑問をしましたが私は此先生は年老ひたるが爲め診斷しても病性を知る事が出來なくなつたと思て居ました。

「デニース」の病氣は日に增し惡るくなりて最早床を離れる事も出來なくなりました「ムリール」は毎日親切に看護し呉れまして寸時でも病室より去りし事なかつたが或晩「ムリール」が他室に行た時「デニース」は私の手を取りまして細き聲にて「亰人妾はもういけません」と述べました私はびつくりすると亰人は皆な御存じでせうが私は姉さんの爲めに毒殺されたから是非助かりませんと少し怒りの聲をも混して述べました。

そんな事があるものか御前は熱に浮かされて居るのだよ。

イーエ昨晩姉さんは妾が眠て居ると考へて小壜から毒藥を藥の中に注き入れました姉さんは妾の幸福を忌み嫉みて貴人の奥様とならうと希望して居ますけれども貴人後生ですから夫婦になる丈けは御廢し下さいまし——御願ですから………。

私は「デニース」の手を固く握て約束せんと思ひし時、スヤ、スヤと眼を閉ぢたまゝ永眠しました、此時「ムリール」も室内に來ましたから其手を握りて妻の床の傍に連れ來りて死顔を見せて大聲に「御前さんは遂に此樣なる事に立ち至らせたのだ」と呼ぶと全く愛に狂した爲めなりとて今迄の事を白狀しました。

私は御前さんを訴へれば家名を汚して兩親の名も出る事となれば訴へはしませんが二度と再び私の眼に入らぬ樣此地より御逃げなさい。

かしこまりました最早御目に懸りますまい」と小聲にて云ひました。

翌朝は姉も前に妹に與へたる毒を飲みて床中に斃れて居ました、私は此姉妹の相續者となりましたが今は此秘密を知るものは私一人でした其後二三日を經て墓地より歸る途中例の醫師と道連れとなりました處「御目出度存じます毒の使用は中々御上手ですねえと突然唇を破つて聲が出で來た。

何ですと私は飛上つて呼びました。

何にさ御宅の一件を訴へれば世間の大騒動となりませうよ、細君の御病氣は變だわい、と、にらんだが果して今日は證據を押へました小壜の水を試驗しまた今頃は細君の姉さんも、うらんで御出でゝせう。

貴君は變に皮肉に嘲弄りなさるが貴君は私が最愛の妻を毒殺したと御疑り、なさるのですか——何樣云ふ理由で。

醫師は鼻の先きで「へ、へーン」と笑つて「考へて御覽なさいよ、二人を殺して德をするのは誰です貴君が

二人の相續者となれば甘まゝと彼の財産は御手に入りますよ、然し此樣な事は裁判官の云ふ事で私の業務には關係わりません。

私は事の意外なるに驚きましたが是非がない幾遍考へ見ても如何樣にしても私が下手人らしく見へたから此物語中如何ですか貴君は此場合には何となされますかと一寸問ひ懸けられたが、さう如何して宜ひか知らんと私は不意を喰らつて答に窮した。

底で私はもう此樣になつては仕方がないからと決心して醫師に向ひ「御推察の通り私が悪るかつた、が然し兩方の家名を汚すのも如何ゆゑ私は自殺します。

夫れは宜ひ御決心貴君は未だ榮譽心を失つては居ない私も男だ貴君の爲めに沈默を守ります。

私は死後の爲め諸事を處理するの猶豫を請ひしに醫師も承諾して一所に私の故郷に同伴せんと計ひしかば義父に暇を告げ滊車に乗りて出發しました、途中列車が全速力にて馳せし時戸を開きて用ありげに醫師を呼び寄せ急に突き落して醫師を壓死させました。

列車が目的の地に着するや警察署に行きて同伴し來りし醫師が急に投身して死せしとを告げしに誰も私を疑ふ人もなく死人に口はなし先づ私は虎口より免かれました。

玆にて額の汗を拭きつゝ此樣なる事が原因となりて私は遂に發狂しました」と云ひつゝ立上りさま「今は貴君も私の大秘密を知りましたねえ」と呼びました。

私が御尋した譯ではないに御自分で」と云ふや云はぬに「何だと」と突然叫び眼を見開きつゝ私の傍に近寄り來ましたが發狂者と爭ふも無益と思ひつゝ急に後方に避けました。

貴君を此窓から突き落さんと呼ひつゝ町の方に向て居る窓懸をはずした時、外にてちりん／＼と呼鈴が響たから私は渡りに舟と走り出でました處美服を着したる

紳士が躰格の强壯なる人を二名伴ひて來り、脫帽して「私は私立癲狂院長ドクトル、フェスタウンと申しますが先刻患者が一人逃亡しまして御宅へ來たと聞きましたから出ました。

私は輕く答へて「へい參りまして、どうも變だと困つて居る處です。

夫れは丁度好い「ロウエット」氏は細君の死後發狂して自分で毒殺したと深く誤信して居ります。

今丁度私を窓から突き落さんと騷て居ります。

今速に連歸ります無〻御迷惑で御座りましたろう、と云ひつゝ同伴せる二名を示して「彼處に看護人を連れて參りました。

一同を案內して私は發狂者が大騷ぎをして居る室內に入りますと發狂者は「ドクトル」其男は私を訴へると云ふから殺す積りだ」と叫びつゝ私に打懸らんとしました。

看護人の一名は大骨を折りて組打を始め一人は衣囊から太き細引を出して縛りかけました。

醫師は私に向ひ貴君が此處に御居では怒るばかりですから失禮ですが連れて出ますまで暫時御退き下さいませんか。

私は壁戶棚の中に隱れました。

難有存じます患者の家族も必ず參上して御禮を述ますで御座りませうと醫師は云ひつゝ、戶を閉ぢ錠を懸けしが「ガタン、ストン」と組打の響は倘ほ聞え時々又醫師の聲として「靜に、靜に心を落附てと云ふを耳にした。

今は又此室の後方にある寢室にて「ガタン、ストン」を聞きければ又發狂者は逃げ出して彼處に逃げ入りしならんと想像に想像を畫き居りしが暫時にして捕獲せられたりしと見へ全く靜になりました。

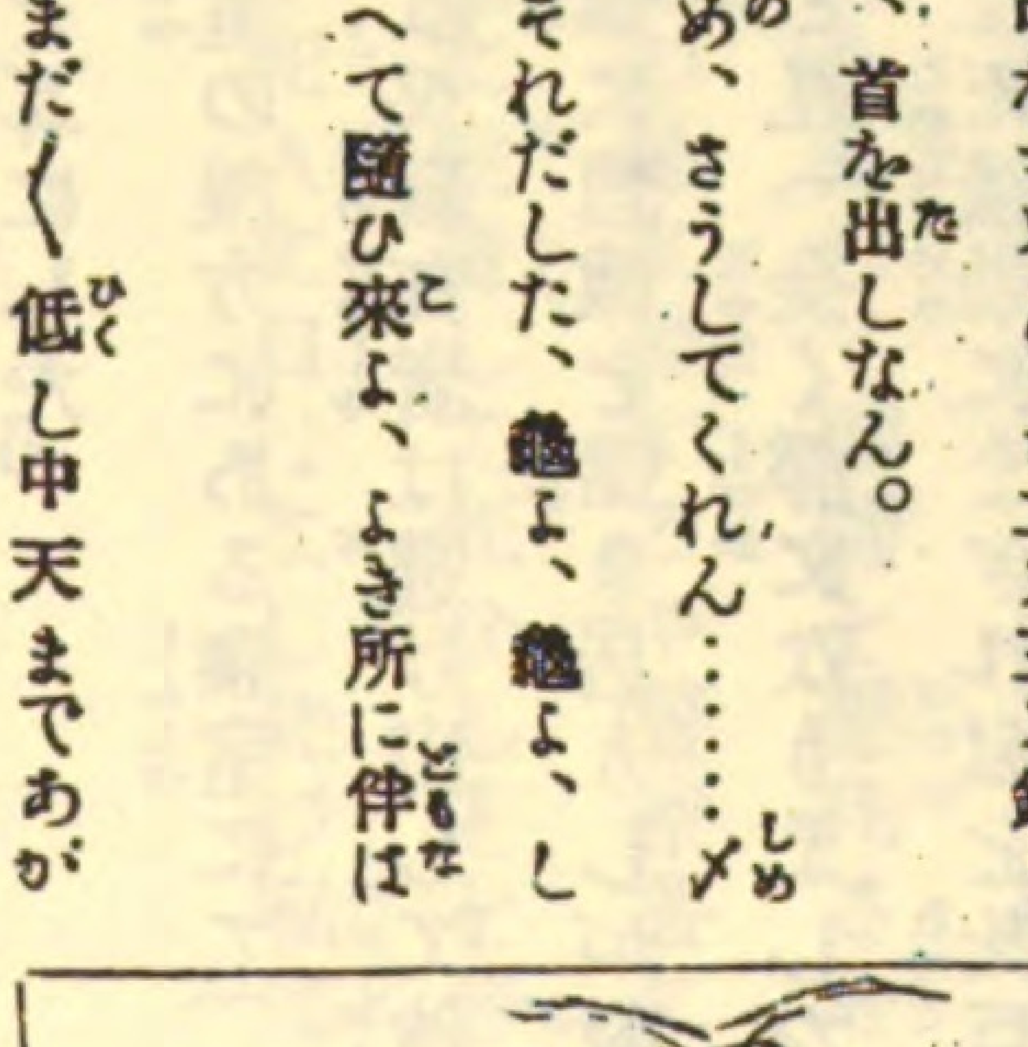
然し醫師は此騷動にまぎれ私を此戶棚より出すことを忘

れし爲め私は晩迄此處に籠城し居り今朝早くから使に遣りし僕が歸りましたから漸く開けさせました。
私は發狂者は如何したろうと云ひしに僕は怪訝顔です、成程無理はない、胡弓も、書籍も、裝飾品も其他高價の物品は悉く消失してありません丸で破屋に轉居した樣でした實に巧に一杯喰はされました。

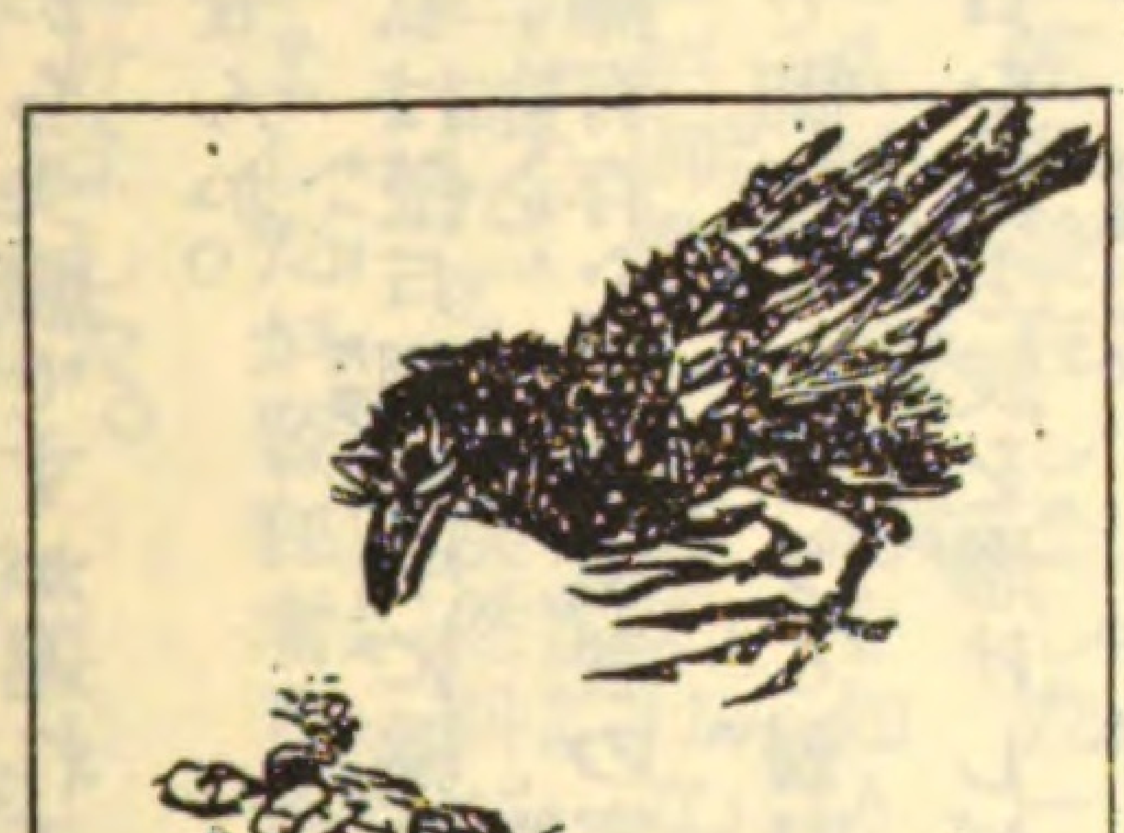
鷹と烏



烏「鷹殿待たれよ、左樣に急げば獲物を逃がす恐れあり、我も力を添へて進ぜん。
鷹「此の龜め動きもせず甲の堅きは面のにくさよ、智慧あらば貸せ烏殿。
烏「さればさよ、好き工風あり、首を銜へて飛びあがり、空中より投げ落さば、碎けぬことのあるべきかは。
鷹「妙なり、妙なり、此策妙なり、しかし此奴首をすくめ、足をちゞめ、施すに道なし、こはいかゞすべき。
烏「さらば背中をコツ〳〵と二ツ三ツ鋭くつゝかば、首を出しなん。
鷹「横着者め、さうしてくれん……〆たり〳〵それだした、龜よ、龜よ、しばしこらへて隨ひ來よ、よき所に伴はん。
烏「鷹殿鷹殿まだ〳〵低し中天まであがれ、下を見るは禁物、あがれ〳〵、それ落ちたり、それ碎けたり、



正味は我物！ブラ旨や！味甘露！ヘン氣の毒ながら鷹へは。
鷹「アヽ重かりし、アヽ重かりし、彼奴あばれて持あましぬ、仕合せ如何に、直ぐに馳走に。
烏「これ見給へ此有樣、餘りに強く振り落され、此通り微塵に碎けて影もなし、鷹殿氣の毒ながら此足にても。





家政

五官試験遊

黄花

夏去り秋闌になりて、室内遊戯の時節もこれより始まらんとす。こゝに遊戯も多かる中に、簡易にして興味多く且有益なる遊といへば、五官試験遊など、其一なる可し。

先づ主客一同大きなるテーブル(丸形なれば最もよし)を圍みて環坐し、主人はこれより五官の試験をなすべく優等者には褒美を與ふべきをのぶ。

(第一)視官の試験　先づ客一同に各鉛筆と紙または石筆石盤を與へ置き、皆手拭をもて眼をかくさしむ。用意整へば、主人は机の眞中にハンケチ、ナイフ、手袋、硯、…等いろ〳〵のものをならべ、時計をみて合圖をなし、客は合圖と共に一寸眼おほひの手拭をあげて其品物を見、また合圖と共に手拭をおほふ。其間に主人は品物を取隠し、然る後一同眼をみひらきてさきに一寸見たる品物の名を紙又は石盤に書す。最も多く最も正しく物名を書きたる者が勝なり。

(第二)鼻官の試験　前の如く眼をかくし、酢、石油、密柑、柚子、菓子、醤油、葱…等いろ〳〵手に觸らぬ樣にして一人〳〵に嗅かしめ、眼閉ぢしまゝ紙に書止めしむ。書き終り品物を取除けし後、眼を開けて書き改む。尤も正しく書きたるものは、尤も正しく嗅きたるなるべし。

(第三)味官の試験　眼をかくす事前の如し。栗、薩摩芋、林檎、梨、菓子、ベナヽ、柿…等を少しづゝ與へて味はしめ、一々書止めしむること前の如し。これは慰にするものなれば、普通の食物にて可なり。只一二個珍らしきものを間々にまじゆれば興多し。

(第四)聽官の試驗　眼をかくす事前の如し。ピアノある家ならば、最もよし。さもなくば、銀貨銅貨を音せしめ、或は鈴或は陶器に金屬をあて、或は金屬と金屬、陶器と陶器、或はガラスの縁を水つけし指もて摩擦し或はコップに水を入れて氷を浮べ、コップにあてゝ音せしむる等いろ／＼の音を出して、きゝとめかきとめしむ。

(第五)觸官の試驗　眼をかくす事前の如く、綿、ブラッシ、ジヤガ芋、毬等種々のものを次より次へと速にまわさせ、一々其名をかきとめしむ。

これは一官のみ試驗するもよし、總てするもよし。一簡易なる褒美を與ふるもよし、凡ての試驗を比較して最優等者に褒美を與ふるとすれば猶おもしろし。子供などには、五官の働を助長するの効ありて、よき遊なり。

子供の取締につきて

K、K、

子供の意志を訓練するは、智識を訓練するよりも大切なり。知識は長じて變ずるを得れども、意志一旦定まりて後は殆んど變ずる能はざるものなり。然れば社會の亂は、多く小供部屋の無政府に始まる。

家庭の空氣は宜しく暖和なるべし。然れども權威と從順の取締方は最大切なり。目上の權威と云ふ事を知覺せしむるは、尤も子供に必要なり。然も此はつか／＼しく權威を振り廻はして子供の心を傷ふの謂にあらず。

凡て成功は、定まりたる法則を守るに基す。ピアノ一トつ彈くにせよ機械一トつ取扱ふにせよ、皆法則に從ふて始めて成る。然るに總ての技術中最も六ケしく且大切なる人となるの術に到ては、親たるもの兎角放擲

して顧みざるは何故ぞ。あはれむべきは無暗に愛せらるゝ子供なり。なほそれにもまして憫むべきは、親を親とし子を子とし權威と服從との取締をなすの知識もなければ勇氣もなき兩親にぞある。

德育に於けるが如く、智育に於ても亦然り。徒らに放任を旨とすべからず。親たるもの一と通りの學問をなし智識をそなふる目的は、小供の學問の方針を定め、小供の何に尤も適するかを認めん爲にあらずや。是れ獨り幼兒の上のみならず。子供に知識開發の道を敎へ導かざるは、山路に迷ひし小供に、自ら道をさがして出でよといふよりもなほ愚なり。

子供の心に?(疑問)の滿つるは、恰も空に星のみつるがごとし。小供の第一の働は疑問なり。大凡人の心と眞理との間には自然の化合力あるものなり。故に疑問の知識に於けるは、飢餓の胃に於けるが如し。然るに今日一般學校の通弊ともいふべきは、此眞理を破壞すること、即學問の食傷にあり。子供部屋又は學校の敎場にての智識的食傷は、食堂に於ての暴飮暴食よりも害多し。

普通敎育の利は勿論のことながら、生存競爭はげしき今日、活計と學問と接近せざれば困るもの多し。然るに一般家庭其他初步の學校敎育に於ては、何れも其卒業者を貧困より救ふほどの力あるもの少なし。已れもし國家の化身ならば、たとひ鞭ちても、凡ての子供をして正直なる生活を營ますやうにす可し。若し生活の道を得ながら自から立ち得ざる者あらば、懲治監に入れて、心の一變する迄は十分に勞働さす可し。凡て此等の事につきて困難なるは、親として兒女の幼時に確たる基礎を据ふるを怠ればなり。若しピアノの一半をうち破りて薪とし、琴三絃の糸を斷ちて若き娘に裁縫料理洗濯其他自活の職業を敎ふ可し。何れよりするも、終は常に初に始まる。社會の改良は、畢竟小供の訓練

に歸着す。

＊　＊　＊　＊　＊

右は米國のチャールス、バアカルスト氏の論ぜし所なり。斟酌して服膺すれば、幾多の敎訓は此中にあるべし。

小兒の泣聲

育兒は家庭の大事、人を造るの基礎也。國家一日も人材なかるべからず、人材は敎育に由らずんば養ふべからず、而して敎育は善良なる家庭に於いて善良なる養育を受けたる者に非らざれば施すべからず。然らば即ち育兒は國家の最重事業、育兒の盛衰は以て國家の盛衰を察すべき歟。家庭婦女の雜誌は我國一二之なきに非ざれども、皆多くは偏する所あり、未た詳く之に及ばず。且つ育兒の學たる、元と心理敎育の一部を成す、此に通せざれは以て彼に及ふべからず。余淺學、薄識何ぞ之を說くを得ると謂はんや、唯研究の際、特に記臆すべきと謂ふ所あれば、乃ち之を記すのみ、固より大方の君子に示すの意なし、但無味乾燥の記臆簿、若し聊か世の父母の參考ともなるを得ば、實に望外の幸となす。

山本良吉



兒の初めて生るゝや、其腦中には一物の貯へられたるなく、而して其生氣甚だ强ければ、能く如何なる刺戟にも感應し、其の感應して得たる所をば容易く取つて其組織の中に入るゝを得。既に取られて組織の中に入れば、其組織の生長と共に生長し、深く精神の基礎となりて、生涯痕跡を心中に殘すべし。是故に兒童を養育する者は、能く心を用ひて、有害の刺戟を與へざらんとを務めざるべからず、而して其有害の刺戟なる者は、往々人の最も注意せざる所に在り、泣啼の如きは即ち是なり。

兒生るれば則ち泣く、何が爲に泣くか。初生兒は猶禽獸の如し、自識もなければ意思もなし、其の泣くが、爲にする所あつて泣くに非ず、又泣かんと欲して泣くにも非ず、內に一種の欠乏あり、欠乏は不快苦痛の感

となりて其心に迫り、之をして自ら泣かしむるのみ。之を例ふれば、猶棒を突くが如し、十の力にて突けば十動き、五の力にて突けば五動く、進退動止、只外のなすに任すのみ、其間豈少しにても精神作用あらんや。此期に在つては、母たる者宜しく其泣啼の狀態を考へて、其身軀に注意し、若し其の起る、身軀の變狀に因るを知らば、直に之を醫して、其苦痛を去るべし。苦痛去れば泣啼も亦自ら止まん。

兒童の生長するに從ふて、事物を經驗すると愈多く、而して心の作用是と共に愈進み、前には徒器械的に運動せる者、今は稍意識的に動作す。身心發達して此度に達する時は、泣啼も亦前の如き單簡なる原因のみよりは起らずして、少くも左の三種の差別を生ぜん。」

一、身軀の原因より發する者　或は內部の苦痛よりして或は外部の患害よりして泣啼するは、最も單簡なる泣啼にして、上に述べたる初生兒のと其類を同うすれば、母も亦之に對すると前と同じかるべし。但母――特に若き母の常として子の苦痛を憐むと深きに過ぎ、靜に冷然として其害を去ると能はず、滿胸の熱情を噴出して之を兒の身軀に濺ぐ。親の子を愛する固より然らざるを得ざれども、之が爲に子に高慢の念を生ぜしめ、子をして隨意に人を頤使するを得る者なりと念はしむるに至ては、子の純眞なる發達を害ふと極めて大也、注意せざるべからず。

且つ親たる者が、子の苦痛を見て驚愕度を失ふ時は、子懦弱柔和の氣を生し、終に剛毅忍堪、百難に當つても屈せざるの念を有する能はざるに至らん。スパルタの兒童が他家に行きて畜類を盜み、寧ろ之に股を嚙まれんも、人に發顯せしめざる氣尙、之を粗野と言はゞ言へ、其意志の强剛なるに至ては、實に驚愕すべきあり、而して誰か此氣を養ひしぞ、スパルタの女子養育法を知る者は必ず其の因る所ありしを知らん。

兒童が苦痛ありて泣く場合に於いても、其の泣くは必ずしも苦痛の爲には非ず。例へば鋭刀にて指を傷つくれば、始は暫く出血せず、數分にして始めて血を見る、其の出血せざる間は默して之を見れども、血を見るに及んで便ち大聲を發するは往々ある所、又は疾く走りて誤り躓きたる時に、始は默して處置に窮するのみなるに、母が走りよりて驚き愕き、慰諭百端するに及んで始めて泣叫するも亦珍しからざる所。泣啼何ぞ必ずしも苦痛より發せんや。母たる者唯平然として苦痛の苦痛とするに足らざるを告げ、泣啼するの甚太笑ふべきを談るべし。己泣けども人應せざれば、兒も自ら其苦痛と泣啼とを忘れんのみ。此の如くすると屢なれば、終には苦痛ありとも泣啼せざる習慣を成さん。小事細故輙ち泣くは、王朝の衰時に於て屢見たる所、性の最も柔弱なる者也。

二、恐怖より發する者　恐れて泣くは身躰の苦痛より泣くと同じ、唯其原因の心に在るを異とするのみ。此場合に於いては、兒童は一時外より迫られて泣くのみなれば、固より自ら泣かんと欲して泣くに非ず、從ふて是よりして惡弊を生ずること少し。母が之を待遇するにも、亦前者と同うして可なり。但一の特に注意すべきは、此種の泣啼は、前者よりは更に柔弱なる性質の兒童の爲する所なれば、母は之に對して、特に其氣を平にし冷淡の風を示すべし。泣く每に輙ち之を慰むれば、獨り兒童を優柔無氣力爲すに足らざる者となすのみならず、更に之をして泣啼は慰諭を得べき一好方便なりと謂はしめ、而して第三種の種類とならん。

前兩種の泣啼を止めしめん爲に、母は往々賞品を與へて之を慰む。子を憐むの情と己の煩を厭ふの念、固より止むを得ざれども、之が爲に反つて其の本然の發達を妨ぐるの憂なきに非ず。一たび泣いて一賞を得、何ぞ二たび泣いて二たび賞を得る能はざるの理あらん

や。泣く毎に賞を受く、是れ泣啼以て賞を受くるの資となすべきを敎ふる也、(求むるに其道を以てせず)、(得るに其法を以てせず、)兒童の道德心を害する者は必ず此種の待遇ならん。且つ眞に賞すべき事と雖、賞するに物品を用てせば、褒賞の本旨を失はん。善あり、功ある毎に之を賞すれば、自然の聯想は兒をして、善と功とは賞與を受けて爲に爲す者なりと念はしめん。賞を受けん爲に善をなす、是れ善に非ずして慾也、義に非ずして利也、利慾の念肺肝に刻すれば、義務の心は他に委せん。義務の心は道德の門也、母たる者決して之を失はしむるべからず。

前二種は其待遇の方法に由て或は害を生ずるともあれど、本來惡き者に非ず。唯次の者に至ては、實に根本よりして道德と相抵觸す。之を

三、我意より發する者　となす。人は生れながら私慾ある者なりとは、荀子、ホッブス、ショペンハワーの輩が其倫論說の基礎となせる所、之が爲に性惡說を立つるに及んでは、固より疑なき能はざれども、幼少なる兒童が多く自利私慾に傾くとは則ち有り。二三才の兒童の泣啼は主として之より發す。內に苦痛あるに非ず、外に刺擊あるに非ず、唯己の我意を貫徹せん爲に泣く、泣啼の有害なるは之より甚しきはなし、人一片の煎餅を持つ、彼之を得んと欲すれども人與へず、與へざれども捨つるに忍びず、則ち泣啼以て之を得んと欲す、是れ泣啼を以て私慾を達する手段となす也。彼をして其泣啼の目的を達せしめんか、是れ彼をして利慾を放にせしむる也。彼をして利慾の放にすべきを知らしむる也、其我意に鞭つ也。

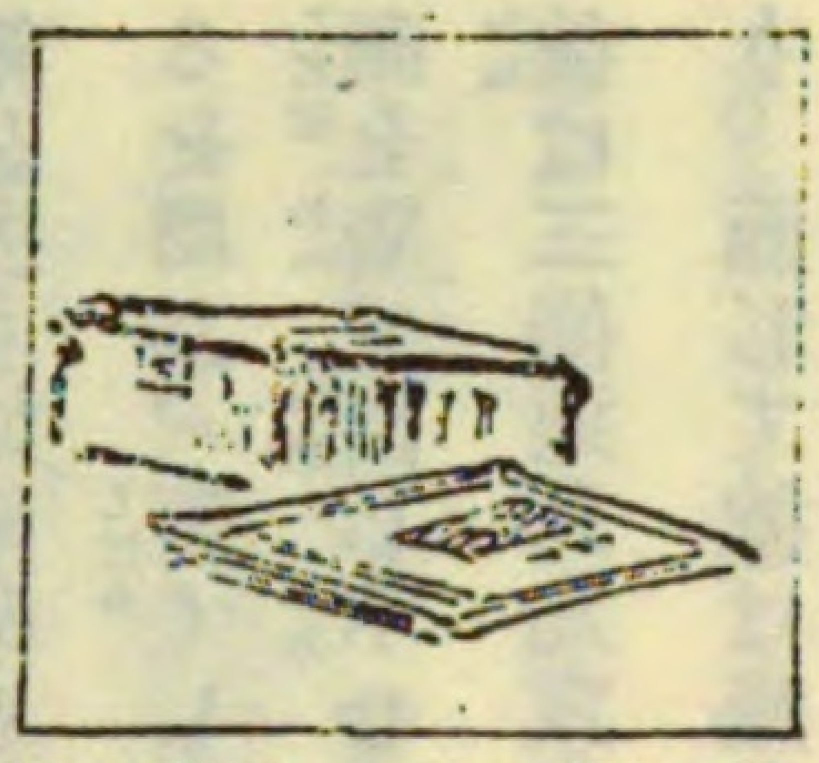
社會に惡といふべき惡は極めて多し、人を害するは惡也、物を盜むは惡也、人を欺くも惡、自ら欺くも亦惡、此類を擧げなば、日を終ふると雖も盡きざるべし。何が爲に此る惡を爲すか、其我意を貫徹せんが爲也、己

を屈して物に應する能はざれば也。請求的泣啼、一たび之に鞭たんか、天下の萬惡は立に見れ來らん。

凡そ人間の爲すべき善、其數亦多し、而れども其實行の方面よりして一言に之を覆へば、身を捨てゝ他の爲にするに在り。親の爲にするを孝と云ひ、國の爲にするを忠と曰ひ、社會の爲にする者を慈善家と曰ひ、道の爲にする者を君子と曰ふ。其の爲にする所の者は各異なれども、其の身を捨つるは則ち一也。親に仕ふる者、若し一點の自愛心あれば、則ち之を純孝と曰ふべからず、國の爲にする者、若し毫厘の其身を顧るあれば、則ち之を眞に國を愛する者と曰ふべからず。其他社會の爲にする者、朋友の爲にする者、道の爲にする者、理の爲にする者、若し窔奥の熒燭程だにも自ら爲にする念あらば、其行爲は便ち之が爲に混濁して其の善たる所以を失ふ。人を敎ふる者は專ら我意の刈去に心を用ひざるべからず。其我意を刈去せんには、先づ其の最も卑き者なるを知らしむるに如かず。今若し請求的泣啼に同情を表し、驚きて其請求に應じなば、是れ兒童に敎ふるに請求の爲すべくして、强ゆるに泣啼を以てすべきを以てする也。强求一變せば命令とならん。泣啼以て人を强ゐ、號令以て人を命じなば、我意何に由て刈去せられ、身を捨てゝ他人の爲にすべきの念何に由て起らんや。苟等三子の說是に於いて見はれて眞とならん。

母若し兒童が此種の泣啼を爲すを觀れば、去つて知らざるが如くし、少しも其請求に應ずべからず。千泣萬啼すとも終に其効なきを知らば、兒童も自ら之を止めざるを得ざらん。止めて後數分にして母其傍に行き、泣きて請求するの非なるを敎へ、其の請求せる物の若きは、泣き止みたる後と雖斷じて與ふべからず。溫順にして願ふ時は之を與へ、泣啼以て之を强ゆる時は、與ふべき物と雖決して與へず、自ら泣いて求むるの非

なるを悟らしむべし。嚴乎たる「必要」は始終人間の頭上を監す、人は只己を捨てゝ之に從ふべきのみ、兒童と雖何を以て脫れんや。必要を知る者は義務を知り、義務を知る者は道德を知る、必要は實に實行上の最上法則也。幼年は成年の基をなし、見は大人の根となる、善人を成さんと欲せば先づ能く敎へ養はざるべからず。千仭の高きも螻蟻によりて潰る、泣啼の事小と雖も、綴にせば以て六事を生ずべし。



小僧の物語（貯蓄）

在西京 岡部紫樓生

七月最終の月曜日余は一婦人の柩を若王寺山頭新島先生の墓畔に送りぬ。此日非常の雷雨に遇ひ。歸途同窓の友人四名共に岡崎町より鴨河の東涯に歩を運ぶ雨未だ全く止まず、皆洋傘を翳す、時に馳せ來つて余輩の一行に從ふ一童あり、顧れば彼は紺の腰切を着せり、股引なく、草鞋を穿てり、然れども帽子なく、笠なく、雨の凌ぐべきなし。余は洋傘の半分を彼の爲にしたり、彼が赤黑き顏に無量の悅を表せり、而して彼は口を開けり、京言葉をもてせり、余は彼が右手に數多の書出しを握れるを見、爰に言葉を交たり。彼は炭屋の丁稚にして得意先を廻る者、途中急雨の困難を訴たり、彼は岡崎町なる大得意樣某家に立寄たりと語れり、彼は第三高等學校に語り及ぼせり、一行をして自然歩を緩ふせしむるに至らしむるものありき。一行は交る〳〵問を發せり、彼は丹波の產、尋常小學校を卒業し今年十三歲、昨年來西陣の炭屋に丁稚となり、彼が主家の仕入店は丹波龜岡にあり、其主人は岡崎町なる某家の近親者にして彼は實に其紹介を經て京都に來れるなり。已にして一行御園内に入れる時に余は彼が左手を以て懷中の

箱を握り如何にも大切そうになせるを見、直ちに何なるを問ふ、暫くして實箱！金箱！貯金箱！と、三樣に語を變て出し示せり。大さ二寸四方、四寸程の箱なり彼は三條通烏丸東入第百拾壹銀行より貰ひ來りしなり。而して彼は語を繼ぎて彼の貯金談に入れり。彼は貯蓄の爲に大決心をもてるなり、大望をもてるなり、大愉快をもてるなり、一行中此の箱を得て貯蓄せんと云へし者ありしかば、彼は之を與へんと言ひぬ。實に彼は貯蓄に他人を導くに切なるものなり、一行は彼が厚意を謝して其箱を受けざりき、彼が志を空しくせざるをつとめたればなり、彼が眼中芝居なし、見せ物なし、飲食の樂みなし、否なきにあらず、此等に打ち勝しなり、余は試に博覽會に就て彼に一問を發せり。

彼は辨當を携へて午前八時より午後六時迄見物し、充分愉快を得しと答ふ、然れども五錢の入場料は以上の彼の爲には再びせしむるべく餘り高額にして彼の貯蓄心より大なる愉快を他の方面に見出さしめたるなり。

余は此の愛らしき、大人らしき彼を伴ふて宿舍に入り古き傘一本を彼の爲に出し、彼が目的を祝し、且つ賞し、其岩の如き決心を實行に置き怠るなからん事を以てし、最も僅かの金を出して與へければ彼は再三固辭して受けざりしが遂に余の意を覺る處あるが如く謝して受け、同時に實箱に投入しぬ此の時余は益々彼が心意の固きを知りぬ、余が最も遺憾とするは彼が姓名を聞かざりしことなれど、余は謹き筆もて此の丁稚を江湖の諸子に披露するのみ。

彼が主家の一丁稚は十五才にして彼に二年先んじて來り、今日一圓餘の貯蓄金をなしたる事を羨ましげに語れり、彼の貯蓄心は此より呼び起されたり。

彼は塵積れば山となるとは人の常に口にする事にして、是を實地にためすは實に難し、然れども余が貯蓄に最も便利と思ふるは此實箱なり。此箱は常に手許に備

へ置き一錢二錢の端錢をも投げ入れ置きて五錢以上になりたる時は何時にても銀行に持參し、其有高を預けなば銀行は是に利足を盛り、又利足にも利足を盛り、三年、五年、十年の後には驚くべき一廉の金となるもので、毎日壹錢宛でも十年には四拾九圓五拾錢になり、丁稚でも金持になると力を入れたり、而して一度此中に入れたる金は出さぬ爲に銀行は封印をなし呉れ預けの度に封紙を元の如くして預け人に渡さるゝ規則にて其開封の時は誠に一だんの樂みなりと。今日序を以て此箱を貰受けし所以を語りぬ。

一行は彌々問を進めたり、之れより彼が貯蓄は如何なるものより來るか、彼の答をのべしめよ、彼が休日は毎月一日、十五日、廿五日の三日にして其都度二錢宛の小使錢を得、實に此の小使錢を此箱に投ずるなり、一月六錢の小使錢を悉く此の賽箱に投じ月末に銀行に持ち運び通帳に記入を受けて歸るなり、一行は眞に其心懸の切なる感動したり。彼の面に視線を注ぎし一行は彼が黒き顔の如何に輝きて愛らしく美くしかりしを見て誠に心地よかりし。

家内の喜と憂（下）

しばのや

一、眞正の幸福は「ホーム」的生活の靜かなる處に存す

二、眞正の幸福は如何に多くの金錢を積むも購求し得べからずして只自力と眞心とを以て靜に素養すべきものにて恰も海底に在る貝の中に眞珠が隱れ在るに均しく他に少しも見へざれば讒者の舌頭に上るともなく恨者の爲めに話柄となるともなし

三、眞正の幸福こそ最も貴重なるものにて汝は如何にするも喧噪なる幸福の中に陷りたるが如く迷ふとはあらじ

四、喧噪なる幸福は眞の幸福にあらず何となれば此幸福は汝の中心に存せず又汝の周圍に在る人々が有する愉快なる心中にも在らずして單に外觀に因て一時惹起せらるゝものなればなり

五、汝は終日飮酒談笑し見よ必ずや終には退屈を感ぜん

六、喧噪なる幸福は汝自身及汝の朋友をも他人と爲し信認するの人とては一もなきに至り汝は獨り此世に立つに均しきの運命に陷らん

七、故に「ホーム」的生活の靜肅なるを愛し公然たる快樂の喧噪に迷ふ勿れ此時こそ初めて汝の「ホーム」に存する「ホーム」の眞味を知らん

八、汝は他人と共に生活するの關係を及ぶ限り單純ならしめよ

九、汝の周圍に在る萬事に就ては其良好なる側面のみを探りて汝の「ホーム」に在るの人々の爲めに此愉快を分ち與へよ

十、汝は常に翌日の爲めに小さき喜と希望とを貯蓄して翌日新に思想を快活ならしむるの導線と爲せ斯くせば滿足に新しき日を迎ふるを得

十一、滿足を知るの人は要するとも少なく一寸した事をも其喜を增すものぞ

十二、最も感ずべき深き喜は常に有利なる働作の結果にして汝が爲し又行ひたる處には汝の精神の力も映出す汝の勉強の結果を見る多ければ益々汝は汝の身の爲めに他より尊敬を受く

十三、人として心配を有せざる者はなく皆未來の爲めに眼を開きあるも未來は暗黑の裡に在れば其與ふる所は何なるやを知る能はず如何に幸福に富むの人も翌日も亦幸福を享受し得るやを知らず

十四、然りと雖も「ホーム」の心配を以て堪へ難き者とする勿れ「ホーム」的生活は心配の數を增すも之が

重量を増すとはあらじ

十五、「ホーム」的心配ありて初めて「ホーム」的幸福を生ず此幸福こそ生活の眞核なり心配なければ隨て希望もあらじ

十六、未來の爲めに心配せざれば家政を知らざる者は單に現時の事のみを考へ其結果にまで之を及ぼすとなし一物を得んが爲めに他の百事を放擲する者は遂に其身を亡すに至らん

十七、汝の「ホーム」的心配が種々雜多にて汝は或は此れ或は彼れの危難を汝の身及汝の家族をして免かれしめ汝の家族の爲め種々の困難を冒して之を破ぶると多ければ又隨て汝が受くるの幸福も多からん

十八、斯の如くして汝は他人の眼が少しも見る能はざるの處に喜の生ずるを詠めつゝ「ホーム」的心配が眞正の「ホーム」的幸福を生ずるを知る

十九、「ホーム」的心配は汝の勇氣を鍛錬するも却て之が爲めに屈する時は汝の力は減少するものなれば此心配を除き此危險を免るゝの策を講ずるの覺悟を爲しあれ

二十、汝自ら其身に打勝たば汝は已に世界に打勝ちたるなり汝の希望を節すれば隨て汝の心配も自ら減ず

廿一、汝は常に最も貴重し最も愛する者までも失ふの覺悟を爲しあれ、否らざれば一朝天より下し給へる免る可からざる議決の爲め一度に汝が有する總てを失ふとあらん

『手藝案内』

原稿の都合により今號にのみ省きぬ

社交一斑

流行の栞

春夢

七歳着の仕度

今から十一月十五日の七歳の祝までは一個月餘あれど、七歳の女子を持たるゝ家庭にては其仕度をなさる處もあるべければ、例年の通りに案内いたすべし

先づ三枚重より記すれば、これは素より縮緬に相違あらず、さて此の縮緬の三枚重は十五六歳に及びても應用の出來るために本裁に仕立て置くが調寶なり、其流行の色は淡べにかけ、うす藤、梅鼠、うす鼠、淺黄ねづみなどなり。

黒地にぼかしは白茶、にく色よし。

べにかけに白茶なんど殊に引立つ。

流行の模様は四君子、古代松竹梅、あやめ、立田川等。

さて其仕立かたは上着一枚を他の色に染め、中着を通しにして、或場合には二枚重として使用の出來るやうにすること能くはやる。

上衣を黒のぼかし模様にして、下着二枚を緋縮緬の無垢地仕立よし。

幽禪縮緬の無垢地仕立もよし、併し引返しにせざれば、裏を無地縮緬を用ゆべし、其色は紅、藤色、肉色、淡淺黄等なり。

縞物は大低二枚重のもの多く、仕立は本裁、四ッ身裁と半々の勢なり、地質は京お召縮緬、上州縮緬、八王子糸織の類、地色は紫地五分の勢にして柄は矢絣、井かすり、牛蒡縞、亂立等。

參考の爲め白木屋より報し來りし價格を擧ぐれば前記縮緬三枚重（四十圓より五十圓）前記幽禪縮緬（三十五圓より四十圓）前記縞物（本裁二十五圓、四ッ身裁十七八圓）なりと。

帶の流行柄を左の繪樣に示す。

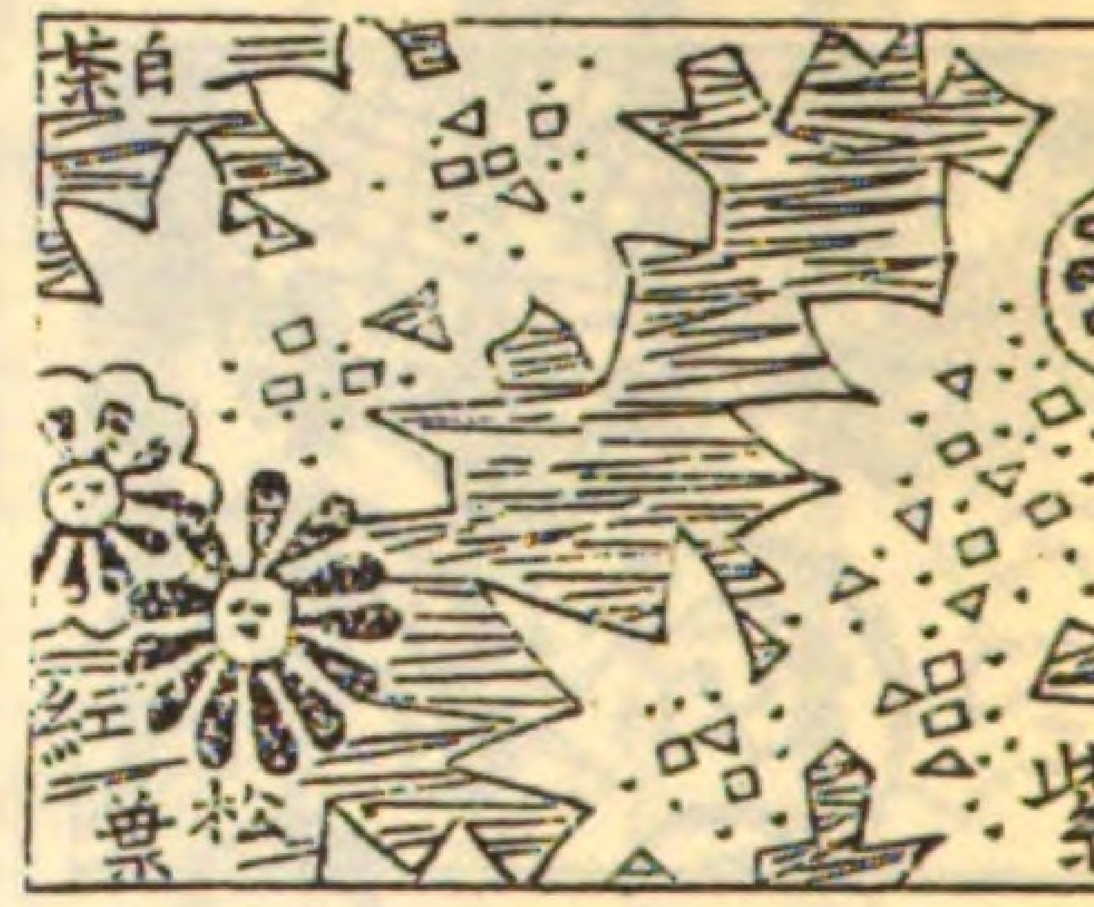
（一）



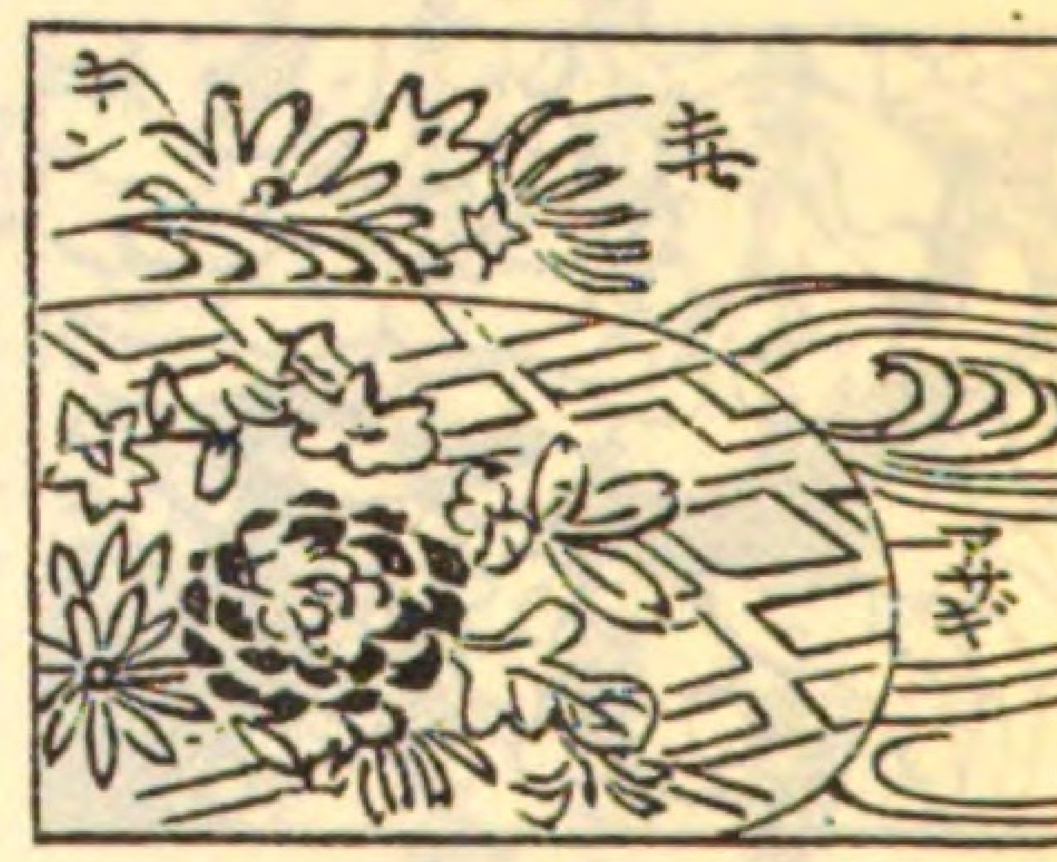
（二）



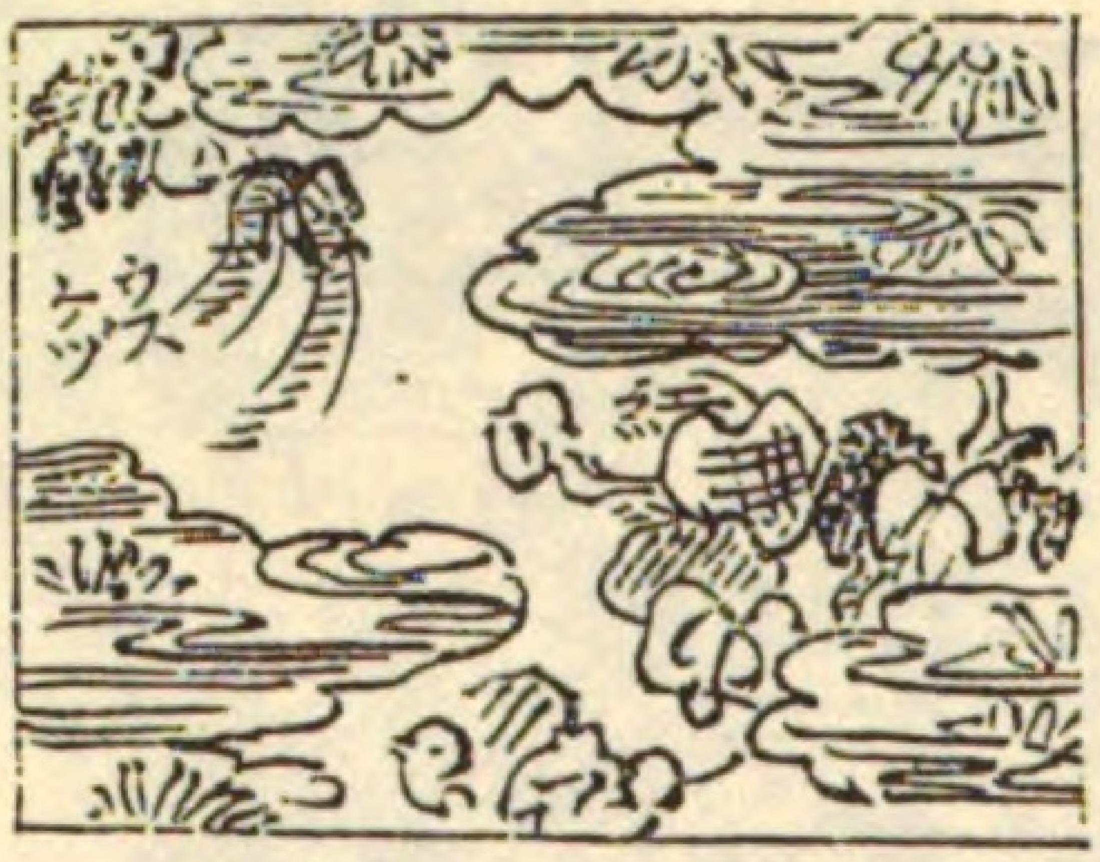
(三)



(四)



(五)



(六)



(七)



(八)



但し帶は本義なれば一尺四寸より八寸までの巾の處を用ゐ、四ッ身ならば一尺二寸の處能くはまるゝ物は殆んど糸錦、右の挿圖を說明せば

(一) 白茶地の小柳織、巾一尺二寸、價五圓六十錢位

(二) お納戸地の糸錦、巾一尺二寸、價九圓三四十錢位

(三) 黑地の糸錦、巾一尺三寸五分、價十六圓五十錢位

(四) 樺色地の糸錦、巾一尺三寸、價十七圓位

(五) 藤色地の糸錦、巾一尺六寸、價二十四圓位

(六) 紅地繻珍、巾一尺六寸、價十七八圓位

(七) 白茶地糸錦、巾一尺六寸、價二十六圓位

(八) 紅地繻珍、巾一尺八寸、價三十二三圓位

次に幽禪縮緬の流行柄は左の如し

（一）



（二）



（三）



（四）

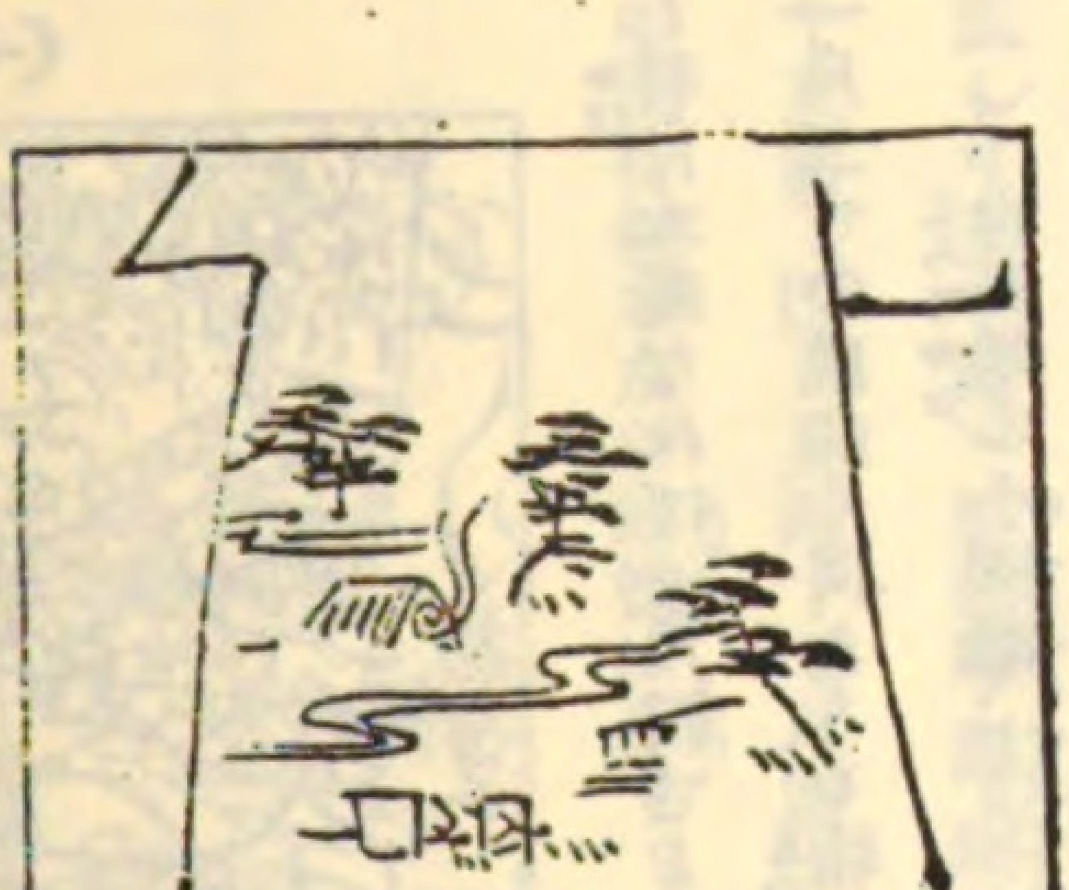


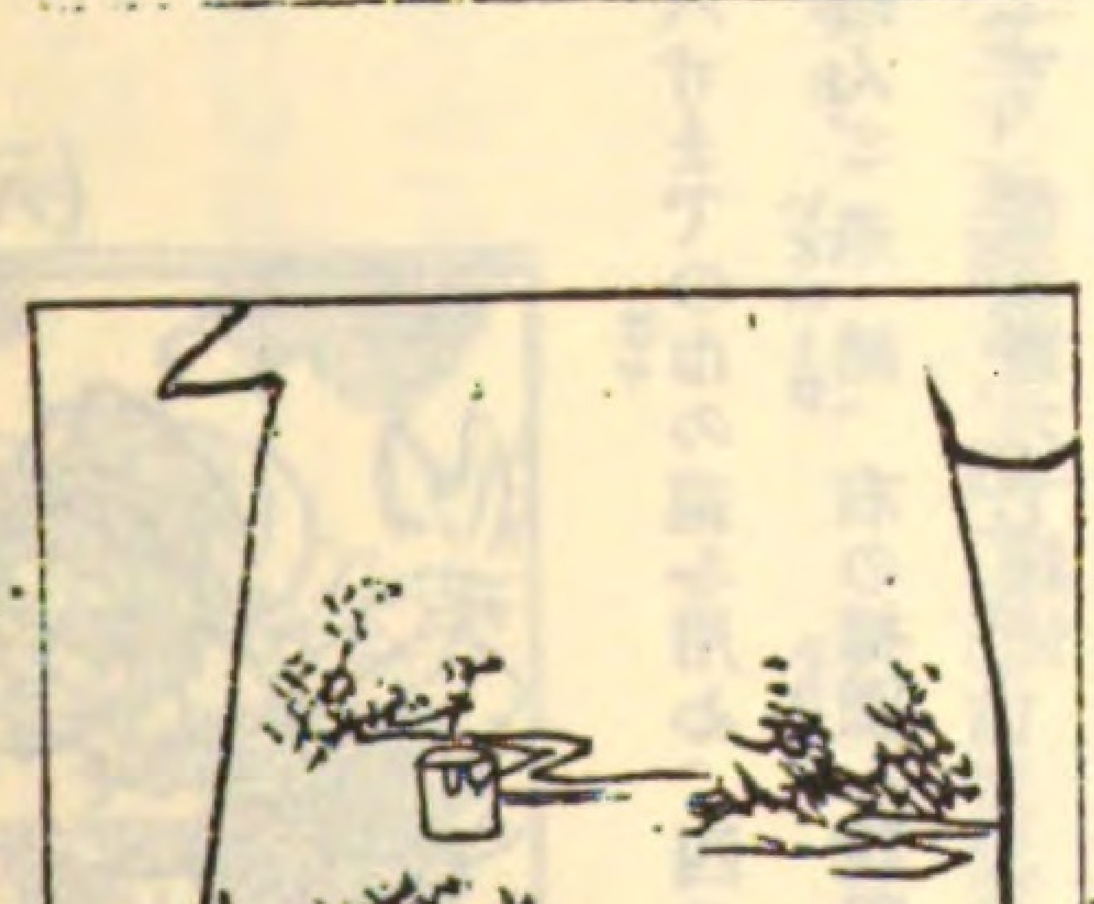
（五）



（一）紫地紋壁、價九圓八十錢位
（二）紅かけぼかし、價十一圓位
（三）紅かけ地、九圓位
（四）黒　地、十二圓位
（五）淡鼠紋壁、十圓位

次に流行の裾模樣は





政治家及軍人十二對見立流行衣服

（春夢曰）白醉小僧といふ知人でもなくまた知らないでもなき口のよい

小僧さんより投じ來る、見立の當りしや否やは讀者の判斷に任すと云爾

颯々と窓より吹き入る秋風の身に染みて、肌冷かな今日此頃、家を治むる內君は、良人、小供やそれ〳〵の冬衣調ふ折柄に、こゝに流行せんとする品柄を、當時著名の貴顯十二對に見立てゝ許し、あたらぬ所を御目にかくべし、但し不敬は小僧の平に謝する所　白醉小僧再拜

伊藤侯爵――紋お召縮緬

註曰、婦人の高等着には、此の品に限ると機屋のこうしやくなれど、さて一反十五圓の價値は無しと思はる、流行の全盛を極むるも永くはあらじ

井上伯爵――紋鹽精物色

註曰、花にかほるの摸樣もありて、紋お召の下着には適當の品と言ふべく、兩者合して完全の一重ねとなりぬべし

大隈伯爵――黑羽二重五ツ紋羽織

註曰、地質硬く、男子外交羽織として、此品を第一に推さる、思ふに追々勢力を占むるならんが機は目下改進中

板垣伯爵――色七子一ツ紋羽織

註曰、一時は老若男女一般を通じて大流行を極めしが、用ゐて變色するにや、今は大に廢れて着する人物稀となれり、さても流行は自由自在に變るものかな

松方伯爵――大島紬

註曰、着して男子らしく厭味のなき品にして、頗る經濟向なり、目下品少き折柄望手多し、急がぬ人は十一月頃の新荷をまつがよかるべし

陸奧伯爵――新糸織

註曰、地質は髮剃の刃のやうに薄ッぺらなれど、機元の機敏なるより頗る珍奇の縞柄を織り出し需用者の意を向ふ

渡邊子爵――越後糸織

註曰、一名信州紬といふ、糸織の生産地は越後の國たけにあらず、米澤、八王子、桐生、西陣、北海道等に種々あれども此の品の淡泊に如かず

榎本子爵――結城紬

註曰、機も染も確なる江戸ッ子的の淡泊品にして農商人の間に流行す、隨分重寶の品なり

近衛公爵――八王子仙臺袴地

註曰、男子の必要品にして頗る評判よろしく、多くあつまる場所に

は此品必らず見ゆ近來機も追々に進みて、數ある袴地中頭角を顯はせり

西園寺侯爵‖黒七子三ッ紋羽織

註曰、紋部大なる方流行、ちよいと外交着にも叶へど前途こうぼうあるや否や

伊東男爵‖鼠縮緬裾廻し

註曰、紋お召をして價だけに見せんとせば、此品の裾廻しを用ゆべし、表地も之がために引立ち、裾は表地のためにいとう見よし

末松無爵‖上州お召縮緬

註曰、價は紋お召の中格位なり、一寸味ひある品なれど、しやくの無きゆゑにや餘り評判立たず

〰〰〰

山縣大將‖本場八丈縞

註曰、流行に老ひたりとの評はありとも、又一種の味ありて、一種の昔堅氣な人が喜んで着する品なり

大山大將‖米澤糸織

註曰、蹴より流るゝ水にて糸をさらし、これを正藍に染めて織上げる故相變らず好評の品

西郷大將‖諸糸織

註曰、十度ばかり糸を藍に染め、縦横を諸にして機にかけるなり、目下流行物の中に重きを置かるゝ品なり

野津大將‖繋糸織

註曰、諸糸織の節のみつらなりてあるを繋糸織といふ、縞物の大將株にして、へいじやうの羽織として最も趣あり

樺山大將‖市樂織

註曰、西京丸太町よりも織出すやうなれど、本場は八王子なり、此品當時流行物の總督の位地にあり

高島中將‖風通織

註曰、市樂の下着として頗ろうつりよく、兩者のはだ合相似たる所あり、此品を重ねてこそ上着も引立つといふべけれ

黒田中將‖薩摩絣

註曰、薩摩絣といへど一反十圓位の品あり、二三圓位の所にて書生羽織として着せば、活潑男子の風采ありて人物に淸く堅く見えます

山地中將‖節糸織

註曰、商人向の羽織として先づ一つ目に數へらるゝ良品なり、柄は惣じて地味なれど、又言はれぬ珍柄もあれば頓て流行社會の親玉とな

るべし

伊東中將＝＝銘仙縞

諺曰、染も機も共に確なる品なれば、これを買つてこうかいせし人はなからん、一度用ひてナ、いゝかいえゝ品だと賞めるものと東京の流行が京大阪に及びしも無理ならず

川上中將＝＝紋子胴裏地

註曰、羽織の裏に随一の品にして、さんほう四方より望手多く、各吳服屋には古き品なく、皆川上の清き品のみなりといふ、

谷中將＝＝本場結城木綿

註曰、物の堅き處に味あり、一たび用ひなばたに類の尠き品なるを知らん

曾我中將＝＝瓦子双子

註曰、品の場所は前者と異れど機の堅き點に至りては則ち一なり、そが理由は唐の細糸を四つに合せて正紺染としたればなり



千代田袋

これは近頃賣出したるものなるが、布帛地え古代摸樣の織物を集め、數種の内より其珍品を撰びて京都西陣に織らせ、其裏地は鹽精を縫ひ合せ、其表と裏の色彩の配合に工夫を凝せり、婦人持の手提なり、流行するや否や。

日用品物價（十月五日）

◉白米小賣相場(同事)(十四日改正協賞十五日ゟ實行)(一圓に付) ●一等白米七升四合●二等白米七升七合●三等白米八升●四等白米八升三合●五等白米八升八合

◉鹽(相場一圓に付) ●赤穗鹽二俵六分五厘●改良八家二俵七分●改良大鹽品切●東濵純鹽二俵六分●本齋三俵四分●改良新齋三俵九分●古積上一俵八分五厘●同並一俵九分五厘

◉綿フランチル(一碼に付) ●白縞平最上十四錢五厘●上等十二錢●中等十錢●下等八錢八厘●同綾最上十七錢二厘●上等十五錢●中等十三錢●下等十一錢●珍平最上十三錢●上等十二錢●中等十一錢●下等十錢●珍綾最上十六錢三厘●上等十四錢八厘●中等十三錢●下等十一錢五厘●斜子織最上十五錢三厘●上等十三錢七厘●中等十二錢●下等十錢●籐織最上十三錢五厘●極上十二錢五厘●上等十二錢五厘●中等十錢五厘●下等九錢五厘●夫婦織最上十五錢●極上十四錢●上等十三錢●中等十二錢二厘●下等十一錢二厘●改良色無地最上十五錢●上等十四錢●中等十三錢●下等十二錢●同綾最上十七錢●上等十五錢●中等十四錢●下等十三錢●黑明光上十二錢五厘●中等十一錢五厘●下等十一錢

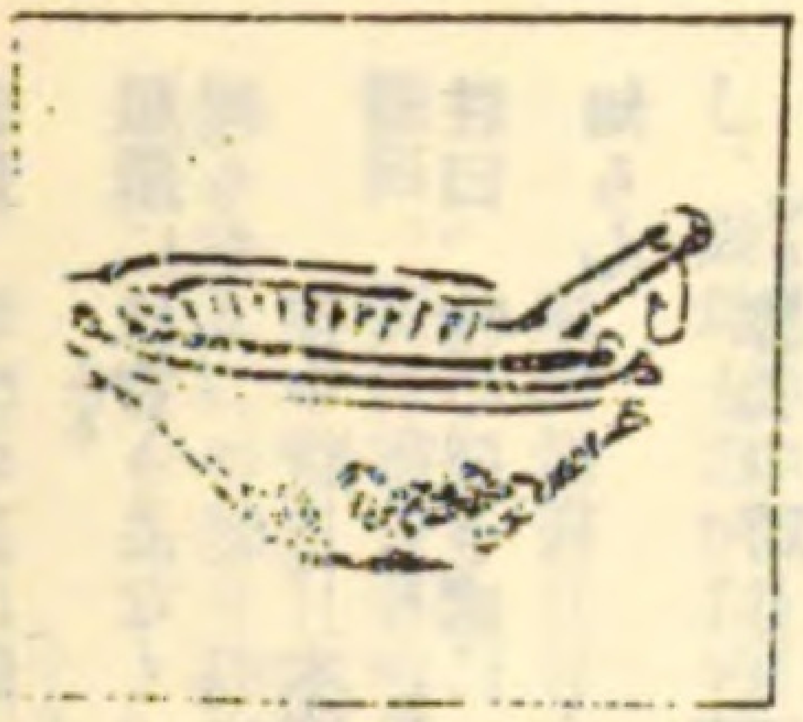
ばけものゝ正体見たり枯尾花　（也有）

螢がほやごちらの露も間にあはず　（同人）

雜録

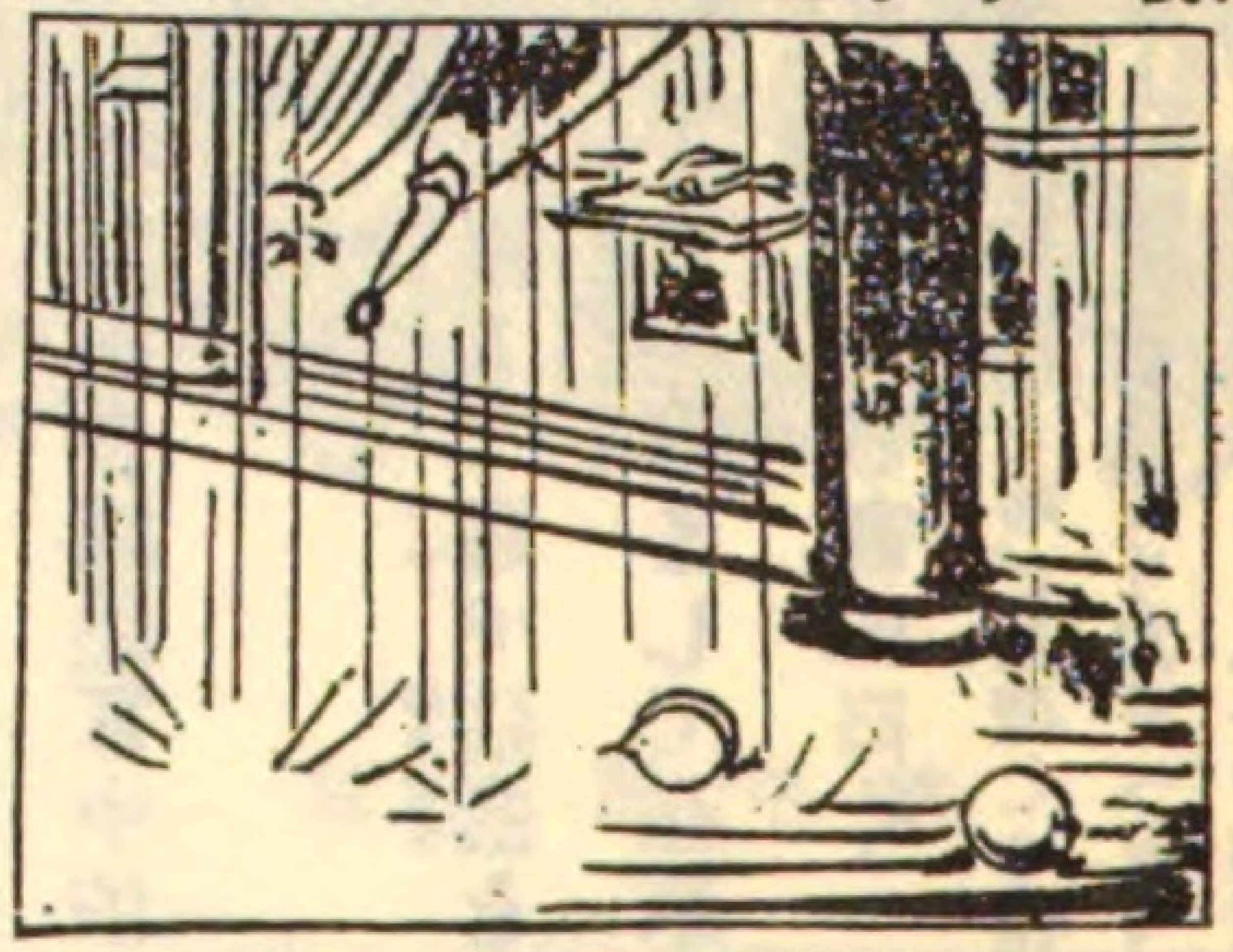
横井也有は名古屋の士にして俳句俳文を能くし殊に小品に優れたり編者或老人の所持せし寫本より同人の物せし擂鉢傳といふ一文をこゝに掲載す

擂鉢傳



備前のくにゝひとりの少女ありあまさかるひなの生れながら姿は名高き富士の俤にかよひて片山里に朽はてん身をうきものにや思ひそみけん馬舟の便につけて遠く都の市中に出でしるよしある店先にしばしたつきをもとめけるに師走の空いそがしき木の葉を風のさそひ盡す比は世も煤掃のふるきをすて物みな新器を求るにつれて臺所によき口ありて宮使の極がてら摺木と聞へしもとにうち合せの夫婦とはなりけるかれは柏木の左衛門にも似ず松木のあらくましき男ふりながら少もかざりなき氣だてのまめやかなれば女も心に蓋もなく明くれいそがしきつとめもおなじ心にはたらきてとろゝ白あへの雪いただくまで糊米のはなれぬ中をねがひ水もらさじとはちぎりけるにその頃せつかひといひしおのこは檜の木の木目細かにその姿やさしきから昔は御所にうぐひすの名にも呼ばれしがおなじつとめの夜ふくる時は走水の下のころびねるちあるをよそのいかきの目にもれしよりさそひも住うき傍輩の中にはしたなき間鍋の口さし出杓子の曲り心よりうき名は立ちそめ炮烙さへ仲間破れしてあれくれ茶釜にふすへられなら坂やわさびおろしのふた面とにもかくにもたゝすむかたなく身をあへ物の顔よごれぬれば買臣の妻の耻をいだき手ならひの君をおもひつゐには土にかえるべき無常を觀じけむある夜鼠のあるくまぎれに棚の端より身を投けるにぞ顔かたちかけ損し見にくきまでの姿にはなりけるかく

てはゝ食物のつとめ叶はじとてあるじの怒りはなはだしく石漆の妙藥にも及ばず妹脊の中も引わかれ内庭まで下られたれども猶さみだれの折々は雨もりの役につらなればいとゞ長門の涙かはく隙なくこゝにもすはりあしくなりて井戸端にころがり出葎に埋れて後はたれ哀といふ人もなかりしにほどなく露霜も置うつり壁の蟲の音もかたゆく比ならん間ちかき寺の門番にひろはれ



ふたゝび部屋にかくまはれながくならはぬ火鉢にさまをかへ酒をあたゝめ茶を煎じてことしはこゝにうさを忍びしにやゝ春雨に梅もちりてきさらぎの灸もすめばまた灰をさへ打あけられ唐がらしといへるものを植られしがからき目ながらさてあとはあるべきをそれさへ秋のいろみ過つゝつゐに橋つめの塵塚によごれふし果はさかなき童部のまゝごとにくだかれ行衛もしらぬ闇の夜の礫とはなりにけるとぞ

吉田松陰（口繪のゑとき）

口繪に示すは何人も能く知らるゝ幕末の志士吉田松陰が同志一名を携へ暗夜に乘じ小舟を浦賀の荒浪にたゞよはしめ、米艦によりて本國を脱走せんとしたるも、不幸事露はれ、彼は萬斛の涙を呑みて、幕命によりて其郷國に幽囚せられぬ、噫千載の遺憾なるかな。

目下胡桃旨し、容易に其實を得んとならば、其殼の合口に水を濕し炭火に當つべしパチリ一殼は兩分す、其實は胡麻あへにし黄菊の葉などを加へ食すはこれから菊時候の料理法なり

時事一斑

三將逝く

南征の軍愈々南進して正に賊の巢窟を掃除するは眼前にある際、我勇猛の三將溘焉として逝きぬ。三將とは近衛第二旅團長陸軍少將山根信成君、近衛第三聯隊長陸軍大佐中岡祐保君及近衛師團參謀陸軍中佐緒方三郎君なり。

山根少將は客月廿三日マラリヤ熱に罹り、尋で腦症を併發し、二十九日逝く(嘉永三年生)其絕筆として在京の知友岡澤、兒玉、寺内の三將官に贈りたる書に曰く

……膺島御分袂後小生等は海上より金州地方に彷徨し殆ど島流しと相成候處兄も好し可なりの仕事出來……夫より陸路臺北より左りへ々々と追み(生蕃堺の方即ち山地也)先月廿八日一同當彰化に入込み申候爾來此線にて消日尤も嘉義附近迄は騎步兵の搜索を出し候……近來は敵勢も大挫折退縮の様子にて永福爺も窮し居候事と推察仕候……當師團も好時機に南進永福爺を蹴飛し吳れ度と存居候又近衛も大連灣にて多數の病患發生又今日に至り喉門の爲め死傷者も不尠目下又々風土病に感する者多く其輕きは五六日間にて快復致候得共下痢を併發……右の次第故酒は殆ど一ヶ月見る事も出來不申內地にて常に暴飲飽食膺島を出ろが出る迄もやりつゞけ居候酬と諦め居申候……小生は幸に始終ピンゝゝと致居候間御安神被下度候。

九月十日　於彰化　信成

岡澤閣下
兒玉閣下
寺內閣下

故山根少將

ピンゝゝとしたる勇將今や亡し。

中岡大佐も山根少將と同じくマラリヤ熱に罹り九月二十三日彰化城外第二野戰病院に逝く。君が軍中より其の愛兒に贈りたる書に曰く。



故中岡大佐

學校にては能く勉學し内にては母上や兄さんの言附けを守り兄弟睦まじくすべし

父より

俊三殿‖克己殿‖五郎殿‖六郎殿

君出征の途に上るに濫み、家人に一封を與へて曰く『予が訃に接せば開き見よ然らずんば開く勿れ』と這は便ち君が死後内顧の憂なからしめんが爲めの家憲也。」

今や其家族諸君は其封中の家憲を見ざるべからざる不幸に遭遇しぬ。

緒方大佐は赤痢症に罹り客月十二日大平野戰病院に歿しぬ。士の戰場に屍を曝す、以て萬世の光榮とするに足れりと雖も、軍國多事の今日、痛惜に堪えず。

臺灣の切手



此挿畫は劉永福が臺灣民主國の名を以て發行したる十仙の郵便切手なり、其色は薄青にして中央にあるは臺灣民主國の表號たる虎の形なり此の印紙の發行せらるゝや香港、福州、厦門等の外人之を珍しがりて悉く買ひ取りたるが故に再版して發行せりといふ。

日本第一の高山

は富士山にして高さ一萬二千四百尺とは誰も能く知る所なるが今は之より高き山あり臺灣のモルクン山是な

り富士山より高きこと四百五十尺と云ふ其他臺灣に高山多く一萬尺以上のものゝみ左の如し

モルクン山	一二、八五〇尺	帥田	一〇、四五〇尺
シルウサア山	一一、三〇〇	大島山	一〇、四〇〇
分水山	一〇、九七〇	内島山	一〇、二八〇
分水獄	一〇、五〇〇		

蓮壽院逝く

第五銀行頭取有村國彦氏の北堂蓮壽院は薩の藩士森元某の長女にして幼より文學に志厚く最も和歌を能くし閨秀の譽れ芳しく長して同藩士有村兼善氏に嫁し女丈夫を以て稱せらる四男を生む長は今の樞密顧問官海江田子爵、次を雄介、三を治右衛門と呼ぶ、即ち安政五年三月三日水戸の浪士十餘名と共に井伊大老を櫻田に要撃せし人なり四を今の國彦氏とす蓮壽院は曾て京都に遊び彼の近衛家の老女村岡と交り深かりしとぞ去れば雄介治右衛門の二氏が櫻田の義擧に與みして身を果たしたる際の如きも毫も愁傷の躰を現はさず却て海江田氏、國彦氏等を激勵して益々奔攘の事に努めたりと云ふ左に錄するものは其遺詠幷に村岡より贈りたる書なり

櫻田の事ありし前に讀める

弓張の月もしくれにくもるかな
　おもひはなたはくまなからまし

旅中の歌

故郷のかきれの卯つき咲ぬらん
　たよりきかせよ山ほとゝきす

近衛殿には親しく參り給ひけるよしにて陽明殿の花の宴にめされて

糸さくらかゝるめくみの露をへて
　くむもかしこき花の盃

陽明殿の御裏の君嵐山に渡らせ給へるさき

長閑にも君か惠めに大井川
　なかれをくみしけふの盃

村岡老女の贈りたる書

御めて度御文下され忝久々に御目もしの心地にて拜見いたし候御揃被
游御機嫌よく御前さまにもさはりなく御逗留被成恭御めて度
扨私事此度は結構に仰を蒙り御布知頂戴實に〳〵めうか至極難有さも
何とも言葉にあまり只々夢とも身の置處なくありかたく御目もし致候
はゝ御歎聽御禮も申入ら〳〵半さ樂み居候處少々風氣にて御坐候處又々
御出立も御近くに相成さても此度は御目もしは不叶云々
おたにさくの事仰下され承り存候安き御事誠に八十七歳の老筆見くろ
しく候へ共年に御あやかり被下候様御遠慮なく明日あけ候つもり云々

村岡

蓮壽院様

思ふ事ありける頃

山のはにかゝる浮雲ふきわけて
　くもりなき世の月をまたるゝ

第二征清壯烈談

定價十錢
郵税二錢

材料の正確と文章の平易とは、前編に於て江湖の既に認識する所なり、本編に至つては更に幾多の雄烈、壯快、痛恨、悲愴の談話を集む、序次錯綜、山盡き、水生じ、花落ち、鳥啼く、讀み去り讀み來れば、泣くべく、勇むべく、樂むべく、悼むべし、千古未曾有の一大快擧は、如何なる代價によりて買はれたる乎、滿州、山東、澎湖の春色は何人の血によりて染められたる乎、是等の事を知らんと欲せば他に求むる勿れ、たゞ夫れ此の書を讀め

●第一征清壯烈談 定價十三錢 郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

醫學博士北里柴三郎先生序
ドクトル佐伯理一郎先生譯補（圖畫六拾個挿入）

十 普通看病學

合巻洋裝全一冊
實價金九拾二錢
郵税金八錢

上巻分本ナシ
下巻實價金五十錢
郵税金四錢

そも婦人の學ぶへき道に就きて看病學の大切なる事は昨年來の日清戰爭によりて普く世の人の知るところとなりぬまた婦人諸姉に於て少くともその一とはしを窺ひ置くべきの學術なる事を知り給ひぬところにても是まで我が邦に於て出版せられたる看病學の書その數多からぬのみならず充分にその意を述べその味を含むの書なかりしはまことに斯道のため惜むべきの事なりきこゝに獨逸國にて有名なる外科の大家「ビルロート」氏の著せる普通看病學なるものありこは「ビルロート」氏のいとも深き學識と博き實驗より得たる著述にしてその親切叮嚀なると彼國に於てすら之にまさるものなきほどの良書なれは此度斯學に經驗多きドクトル佐伯理一郎氏に乞ひ之を譯して世の需めに應ずる事となりぬさて之を譯するには極めて簡明なる文章を用ゐ且つ我邦の風俗と習慣に照し合はせたれば世にありふれたる翻譯書にすぐれてめでたきものなりされば世のこの業を勸むる人としからざる人とを問はず之を購ひ給ひて國に事あり人に急ある時はその學ぶところによりて世のため人のために盡しまた常には之によりて一家の災害を救ひその健康を護り給はゞこの書を世に出したるの勞もまた酬ひられたるものと云はめ

發行元 東京本鄕區龍岡町廿四番地 吐鳳堂書店 ◎ 發兌所 東京日本橋區馬喰町二丁目 島村利助